
ISの世界で彼女を作るぜ

地獄の傀儡師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISの世界で彼女を作るぜ

【Nコード】

N1287W

【作者名】

地獄の傀儡師

【あらすじ】

毎日暇な、日常を過ごしていた一人の青年が、ISの世界に行くことになった。原作知識はないが、原作本と他世界の機体と力を所持した青年は、ISの世界で一体どんなことをするのだろうか？ISの夢小説です。オリ主の他にも、介入者が何人か登場します。かなりの駄文ですが宜しく願います。

IS?何それ? (前書き)

初めまして

駄文ですが、どうか暖かい目で見てください

宜しくお願いします

IS?何それ?

遙一「ああ、暇だな」

俺こと高遠遙一は、何もやることなく絶賛暇中だ

何?ある少年の事件簿に出てくる殺人犯と同じ名前?

偶然の一致だよ。俺はそんな殺人犯何かではない

遙一「こんなに暇なら、また他世界に行って暇をつぶしたいな」

俺はこんなぐうたらだが、実は他世界に何回か行ったことがある

理由は、何か時の管理者と名乗る美少女の琴という子に、「暇なら他世界に行ってみない?」とごろごろしている時に、言われたからである

遙一「でも、命がけなのがな・・・」

この前は、劇場版ガンダムOOの世界でELSと命を掛けた死闘をし、その前は仮面ライダーディケイドの世界で、ディケイドの味方

したせいで全ライダーに殺されそうになるし、この間はロックマン
エグゼ3の世界で、最後プロトに飲み込まれ一緒に消滅しそうにな
るし、本当軽いノリで行ったらかなり危険であると今更だが気付いた

遙一「だが、それでもやはり行きたくなってしまっただよな」

他世界に行く時、色々と力くれるし琴に「本当に、好きな女の子キ
ャラに告白すれば、ずっと一緒にいれるようにしてあげるよ」て言
われるから、やはり行きたくなってしまっ

それに、アニメの世界の子を实际彼女に出来る何て、アニメ好きに
はたまらないよ

遙一「でも今のところ、誰にも告白してないんだよな」

どの世界でも、何故かヒロインは主人公のことが好きな為、その子
自身俺のことが、好きじゃない為言っても意味がない

遙一「はあ、それにしても暇だ」

新しい、仮面ライダーでも見ようかな？

そう思い、立ち上がろうとしたら

琴「相変わらず、暇してるね」

立ち上がろうとしたら、琴が俺の目の前に立っていた

遙一「ああ、絶賛暇中だよ」

琴「誰か、彼女にすればよかったのに、フェルトちゃんとかルリちゃんとか」

遙一「フェルトは、刹那のことが好きだし、ルリもアキトのことが好きでしたから無理ですよ」

琴（実際二人は、遙一君のこと好きだったって気付いてないんだ。それとも、好きな奴には勝てないと自分から身を引いたのかな？）

琴「相手の、意思無視してまで彼女はいらないうつてこと？」

遙一「そういうこと。で今日は何のようだい？」

琴「暇そうで、彼女が欲しそうな遙一君に、また他世界に行かないって言いに来たんだ」

そう言うと、琴は俺の横に座った

遙一「また暫く、暇な日常から解放されるぜ。今度はどんな世界に行かせてくれるんだい？」

出来れば、戦争をあまりしていない世界がいいな

琴「フフフ今度は、インフィニットストラトス通称ISの世界に行ってもらおうと思って」

遙一「IS？」

知らない話だな。それに聞いたこともないな

琴「ISは、今レンタルショップに行けば借りれるよ」

何で俺が、ISを知らないって琴は分かったんだ？

琴「だって、遙一君のその顔見れば分かるよ」

遙一「俺の顔、そんなに分からないって顔してた？」

琴「うん」

そんな、凄い笑顔で顔かないでほしい

遙一「少しでいいから、情報をくれ。流石に何の情報もないまま行きたくないから」

琴「うんいいよ、まずはISの世界はね・・・」

琴の長い説明によると、ISの世界ではISという名の兵器が存在して、それを作ったのが篠ノ之束という天才

ISのコアと呼ばれる物は、その束と言う天才が作った467個しか存在しないらしい

何故467個何だ？と聞いてみたら、途中から製造をやめたかららしい

そして、一番興味深い情報はISは女の子しか使用出来ないということ

それによって、ISの世界では当たり前のように、女尊男卑の世の中になっているそうだ。というか

遙「宇宙に進出する為の、マルチフォームスーツが自分の起こした事件により、その圧倒的性能のせいで飛行パワード・スーツに軍事転用されるとは何がしたいんだ？その束という奴は？」

最初は、宇宙に適用した物を作ったのに、自分で起こした白騎士事件というもので、ISは一気に宇宙とは関係ない兵器になってしまつとわな

琴「それは、私にも分からないよ。それじゃ、とりあえず何時もの能力と機体選択ね。今回は何が欲しい？」

琴は以外にも、俺が凄まじい特殊能力や機体をくれと言っても、素直に分かつたって言うてくれるんだよな

遙「じゃあ機体は、俺が見たロボット系のもの、全てになれると
いうのは無理か？」

流石にこれは無理かな？まあ無理だと思うけど

琴「別にいいよ」

いいんかい！！

琴「でも、ISの世界では色々制限があるから、何になるのか気をつけて選んでね」

制限？面倒くさいな。まあいいか

遙「次に能力は、まあ常に欲しいのはNTとSEEDと純粹種イノベーター、後はA級ジャンパーと普通に人でもボソソジャンプ可能にしてくれ」

琴「それだけ？ギアスはいらないの？」

遙「ギアスの世界以外で、使う気はないよ」

あれは、人の意思を変えてしまう力。あの世界以外で使う気などない

遙一「後は機体展開する時に、その機体に搭乗してた奴の力を展開時のみ使用可能にしてくれ」

琴「分かったよ」ああそう言えばISの待機状態はどうする?」

遙一「待機状態は、真紅の日本刀で頼む」

琴「了解」ああ、その刀はIS展開しても使えるようにしとくね」

何から何まで、本当に助かるな。このくらいしとけば一応大丈夫だろうっ多分

琴「それじゃ、遙一君用意はいい?」

遙一「ああ、ちょっと待ってくれ」

俺はそう言い立ち上がり、自身のいつもの相棒ショルダーバッグを持ち

遙一「準備完了。じゃあ頼むよ」

琴のほうを向いてそう言う

琴「あっ！ついでにこれもあげるね♪」

そう言っつて、琴は俺に七冊の本を渡してきた

遙「何の本だ？」

題名を見ると、インフィニットストラトスと書いてあった

琴「原作だよ♪何が起こるか知りたいならそれを読んで♪」

遙「まあ、読まないと思うけどもらっておこう」

原作を、バックに入れて完全に準備が完了した

琴「じゃあ、用意はいいね！答えは聞いてないよ♪」

遙「何で、そのネタ知ってんだよ！？」

琴「気にしない気にしない。ああ後、ISの世界には遙一君の他にも介入者がいるからよろしくね」

遙一「何！まあいいけど」

別にそんなの、敵にならなきゃどうでもいいし

琴「それじゃ、行つてらっしゃい」

琴の声が聞こえた後、俺は意識を失った

?side

どうもどうも、何か突然ISの世界に来た僕です

理由は、面白い世界に行ってみないか？と言われたので来ちゃいました！

そして現在は夜。しかし、ISの世界に来てはまだ何もやることないんだよね

？「何だ！？私をどうするつもりだ！？」

とそんなこと思って、歩いてたら何やらポニーテールの女の子がI
S装備した女三人組に襲われてるよ

？「おお！可愛い女の子発見！それに襲われてる子篠ノ之箒じゃん
か！」

これは、フラグを立てる絶好のチャンス！上手く行けば箒を彼女
に出来るかも！

？「お前等待てよ！」

僕は、そう行って篠ノ之箒の元へ向かった

？side out

箒side

私は、いつも通り買い物をして帰っていた

だがその途中

？「篠ノ之箒だな？」

箒「誰だ！？」

上空を見ると、ISを展開している三人組がいた

女1「篠ノ之束の、居場所を教えてください」

あの人の居場所？

箒「私は知らない！」

女2「素直に言ったほうがいいと思うよ？」

箒「何を言われても、私はあの人の居場所を知らない！」

女3「中々の度胸ね。なら少し痛い目を見れば話してくれる？」

そう言つて、女の一人が近接ブレードを持ち私に近寄つて来る

第「何だ！？私をどうするつもりだ！？」

女1「ちょっと、痛い目を見てもらうだけ」

女は、そう行つて接近してくる

第「くくるな！」

私は、その場から逃げようとしたが

女1「無駄よ。ISの機動性からは逃げられない」

終わってしまうのか？こんな所で私の人生は？嫌だ！そんなのは嫌だ！助けて助けて！一夏！

？「お前等待てよ！」

その時、一人の男が私の目の前に現れた

第Side out

?side

?「何三人でIS展開して、一人の女の子襲ってんだよ!」

僕はそう言って、篝の目の前に走って行き女を見る

女1「何?アンタ格好つけて、その子庇ってるみたいけど、男の分際でISを展開した私達に勝てると思ってるの?」

?「ああ、思ってるよ」

そう断言した瞬間

アハハハハ

三人組の笑い声が、辺りに響いた

女2「何?アンタ冗談でしょ?」

女3「アハハ、おかしいやつぱり男っておかしいよ」

？「……………」

三人組が、笑ってる間に僕は自身のISを腰に装着し、ドライバーにメダルを三枚入れドライバーを傾けスキヤナーで三枚のメダルをスキャンし

？「好きナだけ笑つてなよ。変身！」

タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ　タトバタトバ！

女1「な何だ！」

第「す姿が変わった！」

ご存知の方が、多いと思うが僕は仮面ライダーオーズに変身した

？「さてとそれじゃ！」

女1に、メダジャリバーを片手に接近し振るう

女1「な何だ！これはISなのか！？」

動揺している女1を、俺はメダジャリバーで斬り続けてる

女1「くう嘗めるな！」

女1も、動揺がなくなり攻撃をしてくるが

？「遅い！」

斬撃を全て弾き

？「終わりだ！」

メダジャリバーで、十字に斬り裂くと女1のISはシールドエネルギーが切れ止まった

女1「な馬鹿な！」

？「どうすんだ？動けない仲間いる状態で誰か来るまで戦つか？」

残りの二人にISごと女1を投げ、メダジャリバーを向けながら言う

女2「くそ退くぞ！」

女3「りよ了解」

二人は、お荷物なISを持ちながら退いたようだ

？「ぶつつけ本番だったけど、何とかなってよかった」

僕は変身を解き、箒の元へ向かう

？「大丈夫？怪我とかしてない？」

箒「だっ大丈夫だ！あっありがとう」

うん、怪我してないみたいだからよかった

？「よかった。君みたいな、可愛い子に怪我がなくて」

第「かつ可愛い！？わ私が！？」

え？普通に十分可愛いと思うけど

？「うん。十分可愛いよ」

第「し失礼する／／／」

そう言うと、彼女は歩いて行ってしまった

？「あつ！ちよつと待って！」

僕は慌てて追う

第「な何だ／／／？」

？「家まで送るよ。またあんなのに襲われない為にもさ」

箒「べ別に、そこまでしてくれなくても／＼」

？「また襲われて、君に怪我させたくないからさ。駄目かな？」

箒「うっ！じゃっじゃあお願いする／＼」

よっしゃー！篠ノ之箒と一緒に暫くいれるぜー！

箒「えっとその、さっきのあの姿は何なんだ／＼？」

並びながら歩いていると、箒が僕に聞いてきた

？「そりゃ勿論、ISに決まってるじゃん」

箒「お男なのに、ISが使えるのか？」

？「使えなきや、さっきのは一体何だったのかな？」

まあ本当は、一夏君だけが男でIS使えるんだけどね

箒「た確かにそうだな」

？「ところで、何でさっきからずっと顔赤いの？」

箒「な何でもない」

きつと照れてるんだよね。照れた箒も可愛いな

そうこうしていたら、箒の家に着いた

？「それじゃ、僕はこれで失敬するよ」

箒「ま待ってくれ！」

早々に、立ち去ろうと思ったら箒に呼び止められた

？「何？彼女にでもなっってくれるの？」

箒「か彼女！？ち違う！な名前を覚えてくれないか？わ私は篠ノ之箒だ」

名前？本名普通すぎるから、あの人の名前を借りよう

？「僕の名前は伊達明。宜しくね」

え？それバースの変身者？だって映司の名前より格好いいからさ

明「それじゃ、僕はこれで失礼するよ」

そう言っ僕はその場を後にしました

? s i d e o u t

IS?何それ? (後書き)

次回はISの世界に降りた遙一君の話です

では次回も宜しくお願いします

主人公との遭遇（前書き）

はい今回は題名の通り遙一と主人公が会います

では今回も宜しく願います

主人公との遭遇

遙「・・・あれ？」

目を覚ますと、知らない天井が目にはいった

遙「此所は？」

どうやら、誰かの家らしい。でも何で俺人ん家にいるんだ？

？「あつ！気がついたか？」

男の声が聞こえた。この声は

遙「バナージか？」

だが、入ってきた青年は全然違う奴だった

？「バナージ？誰か知らないけど、人違いしてない？」

遙「いや、その名前は忘れてくれ。で君は誰だ？」

青年を見ながら言う

？「俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

遙「俺は高遠遙一。俺も名前で呼んでくれて構わない」

その言い、身体を起こし立ち上がる

一夏「早速聞きたいんだけど、どうして家の目の前で倒れてたんだ？」

一夏が俺を見ながら言う。他世界から来たから何て言えないな

遙「気ままな一人旅をしていた最中だったんだが、途中で目眩がして倒れちゃったんだよ」

はい勿論嘘です。でも、これで何とか誤魔化せないかな？

一夏「そうだったのか。それはかなり災難だったな」

馬鹿だ。こいつ簡単に信じやがったよ。まあ誤魔化せたからいいか

一夏「特に行く宛無いんなら、今日は家に泊まらないか？」

遙「いいのか？見ず知らずの俺何か泊めて？」

だが、泊めてもらえるならかなりラッキーだな

一夏「別に構わないぜ。千冬姉もいなくて一人で退屈だからさ」

遙「なら、お言葉に甘えさせてもらうよ」

一夏「ああ分かった。丁度今から夕飯の買い出しに行くけど、一緒に行くか？」

遙「暇つぶしに行こう。だがその前に、俺の荷物を知らないか？」

一夏「ああ、荷物なら其所に置いておいた」

一夏が、指差した方向に俺の相棒と、真紅の日本刀が置いてあった

遙「助かった。これがないとヤバかったんだよ」

そう言い、相棒の中から財布を出しポケットに入れ、日本刀を周りから見えないように腰に差した

一夏「そんな日本刀何で、持つてく必要はないか？」

遙「まあ、用心に越したことはないだろ」

そして俺達は、近くのスーパー向かった

遙「偉いな。姉の為に、一生懸命頑張っている」

一夏「そんなことねえよ。ただ、俺はいつも守られっぱなしだからさ」

そう言いながら、一夏はキャベツを入れている

今日は、野菜炒めと鯖の塩焼きに味噌汁とご飯という献立らしい

一夏「遙一は、何で一人旅何かしてるんだ？」

何でと言われても、嘘の理由だからな。何て言おうか？

遙一「まあ、暇だからだよ」

いつも暇なのは事実だからな

一夏「暇だからって、旅何かしたくなるもんなのか？」

遙一「それは人によるよ。俺は、暇になると旅をしたくなるんだよ」

実際は、暇だところどころしながらアニメ見てるだけ何だがな

一夏「俺は、暇な時は何してるかな？あんまり、暇な時がないから分からないな」

そう言いながら、鯖を三つ入れている。ちゃんと、喋りながらも値段等は見ているようだ

遙「そんなに忙しいのか？」

一夏「ああ、この間までバイトしながら家事してたからな。それに、またこれから忙しくなりそうだからな」

一夏は、そう言い豚肉を入れる

遙「何故、これから忙しくなると分かるんだ？」

一夏「これから、IS学園に通うからだよ」

え？IS学園に通う？

遙「ISは、女の子しか動かせないんじゃないのか？」

ていうか、まさか一夏が世界で初めてISを起動させた男なのか！？

一夏「そうらしいけど、何でか俺がISを触ったら起動しちゃってさ。そして、世界初の男のIS起動者になっちゃって、そのせいでIS学園に入学が決まったんだ」

遙「そうか。まあ何にせよ、確かに忙しくなりそうだな」

まさか、一夏がこの世界の主人公とはな。見た感じ、俺と同じ平凡そうな奴だが、やはりISに乗ったら強いのだろうか？

一夏「でもずっと、不思議に思っただよな。何であの時、起動したんだろうって」

それは主人公だからさ。何て言えないな

遙「考えても、仕方ないだろ。今は、自分に出来ることをやれよ」

一夏「確かに、考えたって分からないな。さてこれで買う物は最後だ」

そう言い、一夏はネギを入れその後俺達は、会計を済ませスーパーを出た

遙「晩飯作るの、俺も手伝っていいか？泊めてもらうんだから、それぐらいさせてくれ」

一夏「助かるよ。一人で作るの結構面倒だから」

そう、何気ない会話をしながら歩いていると

？「織斑一夏だな？」

遙「&a m p；一夏」？」

目の前に、いきなり女が三人現れ一夏の名前を言う

一夏「ああ、俺が織斑一夏だけど何か用か？」

女1「一緒に来てもらおうか」

女1がそう言うと、三人がISを展開した

一夏「なっ！お俺はアンタ達何かと一緒に行く気はない！」

一夏は、三人に怒鳴りながら言うが

女2「お前に、その気はなくても連れて行く」

女2がそう言うと、一夏に接近し攻撃しようとしたが

遙一「俺を忘れるなよ」

俺はISの拳を、琴からもらった真紅の日本刀で防いだ

遙一「一般人に、ISを展開して攻撃するなどお前等正気か？」

攻撃してきた女を睨み言う

女2「ばれなければ問題ないでしょ。それに、貴方は目撃しちゃったから消えてもらうしね」

遙一「危ねえな」

ISの拳を避け、再び刀を構える

女3「そんな刀で、ISを倒せると思ってるの？」

女1「だとしたら、相当ISを馬鹿にしてるんだな」

残りの二人も来て、普通なら絶対絶命のピンチだな

一夏「遙一、これってスゲーヤバくない？」

遙一「普通ならな。しょうがない、こんな所で使うことになるとはな」

俺は刀を鞘にしまい三人を見る

女1「何だ？今更勝てないと分かったのか？」

女2「気付くのが遅いよ」

女3「大人しく死んで」

遙一「阿呆が、・・・行くぞHivガンダム！」

機体の名前を、呼んだ瞬間刀が光り俺を光りが包み込んだ

全員「な何だ!？」

そして光りが消えると

遙一「ほう、俺自身がH i vになるとはやはり驚きだな」

現在俺は、全身装甲状態のH i vガンダムになった

左手には、ビームライフルが握られ右手にはシールド、背中にもち
やんとフィンファンネルがある

女1「なっ!馬鹿な!」

女2「全身装甲のI S!？」

女3「そんな物の情報何て!」

おお、驚いてる驚いてる。まあ本来なら存在しないI Sだからな

遙一「戦闘を開始する」

三人「！」

即座に三人は上空に飛んだ

遙「逃がさん！」

俺も上空に飛翔し三人を睨む

女1「例え、見たことがないISでも！」

女3「3VS1で勝てると思うな！」

三人は俺を囲むように散開し

三人「喰らえ！」

一斉に、ミサイルとマシンガンを射ってきた

遙「当たらねえよ」

ミサイルを、ライフルで破壊しマシンガンをギリギリで全て避け

遙一「面倒だ。一気に終わらせる！行けフィンファンネル！」

三人「な何！？」

三人の内の二人に、フィンファンネルを飛ばし俺は残る一人に突撃する

女1「私を嘗めるな！」

マシンガンを、連射してくるが全てシールドで弾き

遙一「其所だ！」

ビームライフルを連射し、更に接近する

女1「くそ！」

女1が、近接ブレードで接近してきた俺に斬りかかるが

遙一「遅い！」

盾を投げ捨て、即座にビームサーベルを抜き受け止め

遙一「落ちろ！」

片手のライフルを至近距離で連射し

遙一「終わりだ！」

最後に、反転しながらハイパーバズーカを直撃させた

女一「馬鹿な！」

相手の、シールドエネルギーがなくなりISは地面に落ちた

下を見て見ると、残りの二人もファンネルにやられて落ちたようだ

遙一「一夏大丈夫か？」

とりあえず、落ちた三人を放っておいて一夏の元へ向かった

一夏「あっああ、俺は大丈夫だ。・・・遙一もIS操縦者だったのか？」

遙一「展開したのは、今日が初めてだな」

正直、負けるかもしれないと思っていたが、機体性能と今までの他世界での戦闘で得た、技量のおかげで勝つことが出来た

？「其所のお前達、何をしている！」

遙一「ようやく、誰か来たか」

ていうか、今クランの声がした気が

一夏「今の声まさか？」

少しすると、スーツ姿の美人が此方に来た

？「一夏？こんな所で何をしている！？」

？一夏の知り合いか？

一夏「やっぱり、千冬姉だったか」

ほう、この美人が一夏の姉かうゝむ顔良しスタイル良し、そして声がクランとそこはどうでもいいか

遙「すいません。コイツ等どうかしてくれませんか？」

千冬さんを見ながら俺は言う。ちなみに三人は、逃げられないようにフィンファンネルで囲んでいる

千冬「今手配をする。だが、その後お前は私と一緒に来てもらっぞ」

遙「了解した」

千冬さんが、連絡をした後ISを装備した奴等が、三人を連れて行ったのを確認し俺もISを解除した

そして、一夏を家に戻した後俺はどうかの学校の教室に、千冬さん

と入り椅子に座った

千冬「まず、私は一夏の姉の織斑千冬だ。弟を助けてくれてありがとう」

遙「彼には、倒れていた自分を助けてもらった恩がありましたから」

まあ、恩がなくても助けていたけどな

千冬「そうか。ところで、お前に聞きたいことが多々あるが答えてくれるか？」

やはり聞かれるか。まあ可能な質問だけ答えよう

遙「質問により、可能なら答えます。不可能なら、黙秘権を使用させてもらいます」

千冬「分かった。なら、まずお前の名前を教えてください」

遙「自分の名前は、高遠遙一です」

千冬「高遠、お前は何処から来た？」

遙一「何処も何も、自分は日本出身です」

千冬「何故ISを起動出来る？」

うわ！面倒くさい質問だな

遙一「分かりません。何故か起動出来たと言えません」

千冬「あのISは何だ？どうやって入手した？」

まただるい質問だな

遙一「あれは、自分が貰ったISです」

千冬「誰に貰ったんだ？」

これは、答えちゃいけないな。どうせ言っても信じないだろうしな

遙一「黙秘します」

千冬「ISを、起動させたのは今回が初めてか？」

遙一「はい。さっきが初めてです」

千冬「あの三人に、見覚えはないか？」

遙一「全くありません」

千冬「じゃあ最後の質問だ。お前はこれからどうする？」

これから？うゝむどうしよう？

遙一「まだ、特には決めていません」

千冬「なら、IS学園に入学してもらうと助かるんだが？」

遙一「学園に居れば、当分は狙われなくて済むし暇も潰せる。分かりました。入学します」

正直、IS動かせるからって世界から狙われるのは御免だ。それに、学園に行けば女の子がたくさんいるしな

千冬「そう言ってもらえて助かる。では明日、私と一緒にアリーナに来てもらうぞ」

遙「了解しました」

千冬「では、帰るとしよう」

千冬さんが、立ち上がったので俺も立ち上がり、学校を後にした

遙「クラ・・・じゃなくて千冬さん。自分以外に明日アリーナに来るIS操縦者は居ますか？」

まだ、介入者が居るんなら恐らくアリーナに来る筈

千冬「お前以外にも、いるが何故そんなことを聞く？それと最初のクラとは何だ？」

遙「いえ、何となく。えっとそれは、千冬さんは非常に自分の友

人と声が似てるもので、ついそいつの名前を言いそうになってしま
うんですよ」

千冬「そんなに、私とその友人の声は似ているのか？」

いや、似ているというより同じ何ですけどねえ

遙「はい。非常によく似てます」

千冬「まあ、名前を間違えないように気をつけろよ。さて家に着い
たな」

無事に、織斑家に着き俺と千冬さんは中に入った

一夏「遙ー！よかった無事だったか」

部屋に入って、いきなり一夏が何か言ってきた

千冬「一夏、それはどういう意味だ？私が高遠に、何か生死に関わ
ることでもするとも思っていたのか？」

千冬さんが、凄く怖い笑顔で一夏を見ている

一夏「いついや、そんなことはないけど」

千冬「まあいい。一夏、飯は出来ているか？」

千冬さんが、スーツを脱ぎ捨て一夏に聞く

一夏「ああ、出来てるよ」

一夏がそう言ったので、テーブルに向かうともう飯は出来ていた

というかさ

遙「一夏、千冬さんは家事とかやんないのか？」

一夏の耳元でそう呟く

一夏「やらないじゃなくて、出来ないんだよ。全部俺に任せてるからな」

何だ、こんなに美人なのに家事が出来ないとは

千冬「家事が出来なくても、生きていけるぞ高遠」

なっ何！心を詠まれた！まさかNTか？

千冬「馬鹿なことを言っていないで、ご飯にするぞ二人共」

千冬さんは、スーツ姿から動きやすそうな白いシャツに、短パンと
いう格好になっていた

遙「じゃあ、飯を食べるとしよう」

一夏「そうだな」

俺と一夏も席に着き

三人「いただきます」

その後は、喋りながら飯を食べ終わったら、風呂に入った

遙一「恐らく、明日に介入者の奴等と会う。何とか敵にならないようにしないとな」

そう呟いた後、俺は風呂を出て布団に行き眠った

? side

? 「明日か」

? 「ああそうだな」

とあるホテルの一室で、二人が話している

? 「だがまさか、いきなり介入者と会えるとは思わなかったよ」

? 「それは俺も同じ」

会話から分かるように、この二人も遙一や明と同じ介入者である

？「明日アリーナに来いとは、まあ入学がかかってるから行くしかないな」

？「それに、逆らったら後が怖いしな」

あの人に、逆らったら確かに後が怖い

？「そう言えばまだ名前聞いてないな」

？「ああ、そう言えばそうだな。・・・俺の名前はノイズだ」

？「それって本名？」

ノイズ「いや、偽名だ」

？「だよな。俺は神行宗って言うんだ」

ノイズ「宜しくな宗。そしておやすみ」

ノイズは、そう言つと眠ってしまった

宗「ああ、おやすみノイズ」

俺も、その後眠りについた

? s i d e o u t

明 s i d e

どうもどうも！伊達明です

箒「明、風呂が空いたぞ」

明「分かったよ」

はい僕は現在、箒の家にいます。理由は、近くで野宿してたら箒に見つかり、何で野宿している？と聞かれたので、帰る家がないと言ったら箒が家に泊めてくれた

イヤーまさか、箒の家に泊まれるとは実は僕、けっこうラッキーだったりして？

箒とも、けっこう喋ってるよ。ていうか、一夏のことばかり喋る
と思ってたら、以外にも僕のことを聞いてきたし

フラグが、立ったかなと期待してみようかな？

ちなみに今日、箒の家に織斑千冬さんから電話があって、僕に明日
アリーナに来るように言ったらしい

何で、僕が箒の家にいるって分かったんだろう？

まあいいか。さて、明日アリーナに行かなくちゃいけないから、今
日はもうお風呂入って寝よう

僕は、その後お風呂に入って寝ようとしたが

箒「明、ちょちょっといいか？」

箒が僕の部屋に来た

明「うん、いいよ」

箒「し失礼する」

箒が、そう言いながら入ってきた。何の用だろう？

箒「えっと、そのあ改めて昨日助けてくれてあっありがとうございます／＼」

箒が、顔を赤くしながらお礼を言ってきた

明「可愛い女の子を、守るのが男の使命だから気にしないでいいよ」

箒「こっこんな私でも可愛いのか？／＼」

明「昨日も言ったる。箒は十分可愛いよ」

笑顔でそう言っていた。勿論嘘ではない

箒「じゃじゃあわ私はもう寝る！おおやすみ／＼」

顔真っ赤にして、箒は部屋を出て行った。イヤー本当に可愛いな

さて、明日の為に僕ももう寝ますか。・・・入学出来ると信じながら

明「まあ、何とかなるな」

そう呟いた後僕は眠った

明 s i d e o u t

主人公との遭遇（後書き）

今回はアリーナで介入者達の戦闘です

では次回も宜しくお願いします

介入者VS教師と生徒会長（前書き）

全員の戦闘シーンを入れた為長くなってしまいました。

それでは宜しくお願いします

介入者VS教師と生徒会長

千冬「さて着いたぞ」

遙「もうですか？まだ眠いんですけど」

朝の9時に、俺と千冬さんはアリーナに 来た

正直言うと、まだ眠い。もう少し眠っていたい

千冬「他の奴等は、まだのようだな？」

アリーナ内には、まだ俺と千冬さんしかいない

遙「なら自分、ちょっと寝かせてもらいます」

そう言い目を閉じた瞬間

ガシッ

遙「何だ！？つて痛たたた！」

目を開けると、千冬さんが俺の頭にアイアンクローをしていた

千冬「阿呆なことを言っていないで、起きろ高遠」

メキメキ

遙「痛い痛い痛い！起きてます！起きてますから離してください！」

千冬「何だ？起きていたのか？つまらん」

千冬さんは、そう言い手を離してくれたが、今つまらなくて聞こえた気が・・・

千冬「気のせいだ」

また心を読んだだと！やはりこの人は

千冬「下らんことを、考えているなよ」

遙一「すいません」

駄目だ。やはりこの人には俺は勝てない

？「織斑先生！」

何か声がして、入り口のほうを見ると眼鏡をかけた緑髪の背丈が中高生ぐらいのひと、もう二人誰かがつてあの二人は！

遙一「よう二人共久しぶり！」

俺は走って、二人の元へ向かい二人にそう言う

ノイズ& a m p・宗「遙一じゃないか！」

遙一「宗はガンダム〇〇の世界以来だな。えっと」

もう一人は、毎回会う度に名前が違うので名前が分からない

ノイズ「今は、ノイズと名乗ってる」

ノイズ？また変な名前だなあ

遙「ノイズは、ロックマンエグゼの世界以来だな。まさか、二人に会えるとは思わなかった」

この二人は、他世界に行った時に一緒に戦った仲間何だよねえ

千冬「何だ？お前達知り合いだったのか？」

三人「ええ一応」

そう言った瞬間

明「すいません！まだ時間大丈夫でしたよね！？」

？「大丈夫でしたよね？」

遙「& a m p ;ノイズ「今の声は！」

声をした方向を、見てみると見覚えのある男と、学園の制服を着た

水色の短髪の女の子が立っていた

明「おお遙一達久しぶりだな！」

遙一「えっと・・・」

コイツも、名前が毎回違うので名前が分からない

明「ああ、今は伊達明だ」

遙一&ノイズ「バースじゃねえか！」

二人で、思わずツツコンでしまった

遙一「まあ、仮面ライダーディケイドとWの世界以来だな」

明「そうだな。えっと・・・」

明は、ノイズを見る。恐らく俺と同じで、何て呼べばいいか分からないだろう

ノイズ「今は、ノイズと名乗っている」

明「ビッグノイズ？」

ノイズ「それは、プログラムアドバンスだ！」

千冬「んん！話をしてもいいか？」

千冬さんが、咳払いをし俺達を見る

4人「はい」

千冬「まずは、自己紹介をしておこう。私は織斑千冬。IS学園の教師だ」

へー、千冬さんって教師だったのか。だからあんなに威厳があるんだ

？「私は、山田真耶と言います。織斑先生と同じく、IS学園の教師をしています」

この人も教師なのか。何か、胸以外は中高生に見えなくもないな

？「私は、更識楯無。このIS学園の生徒会長です。宜しくね」

最後に、水色の短髪の子が自己紹介した。へーこんな可愛い子が生徒会長なのか

明「じゃあ、僕も名乗っておきますね。僕は伊達明と言います」

宗「自分は、神行宗と言います」

ノイズ「名前は、ノイズと言います」

遙「私は、高遠遙一と言います。宜しくお願いします」

千冬「ああ。では早速今から試験を開始する。試験と言っても、私達三人と模擬線をしてもらっただけだな」

え！それが試験？何だ筆記とかあると思ってたのに

ノイズ「千冬さん。三人で、相手をすると言っても一人余りますよ？」

確かに一人余る。まさか一人は戦わずに終わる？

千冬「私が、二人連続で模擬戦をすれば問題ない」

げえ！俺は絶対にこの人とは戦いたくないな

千冬「ではまず、四人共このISスーツを更衣室で来てこい」

そう言うと、千冬さんは俺達にISスーツを渡してきた

真耶「更衣室まで、私が案内しますのでついて来て下さい」

その後は、山田先生の後に続いて俺達は更衣室に向かい、ISスーツを来てその後

千冬「それでは試験を始める。最初はノイズお前からだ」

ノイズ「分かりました。相手は？」

千冬「相手は、山田先生だ。分かっていると思うが本気でやれ」

千冬さんが、ノイズを見ながら言う

ノイズ「分かっていますよ。じゃあお先にな」

ノイズはそう言うと、手にメモリーとロストドライバーがあつた

遙一& a m p・明「お前それは!？」

ノイズ「行くぜ!」

ノイズは、ロストドライバーは腰に装着し

エターナル

ノイズ「変身!」

エターナル!

エターナルメモリーを、ロストドライバーに装填した

遙「お前のISは、仮面ライダーエターナルか」

ノイズは、仮面ライダーWに出てくる。仮面ライダーエターナルに変身した

ノイズ「それじゃ行ってくる」

マントを翻しノイズは、そう言いISを展開している、山田先生の所へ向かった

ノイズside

ノイズ「お待たせしました。山田先生」

真耶「そそれが、ノイズ君のISですか!？」

やっぱり驚いてる。そりゃISが仮面ライダーだかな

ノイズ「ちょっと特殊ですけど、これが自分のISですよ」

真耶「そそう何ですか。では試験を開始しますね」

ノイズ「はいつと！」

返事をした瞬間に、山田先生がアサルトライフルをぶっぱなしてきた

ノイズ「卑怯だ！何て言ってる場合じゃないか」

俺はエターナルの唯一の武器、コンバットナイフのエターナルエッジを出現させ

当たりそうな攻撃を、全て弾き残りは全て避け接近しようとするが

真耶「そう簡単に、接近はさせませんよ」

しかし山田先生は、マシンガンで牽制しながら同じ距離を保ち続ける

更に山田先生は、飛んでいる為ジャンプなどしたらいい的になってしまう

ノイズ「ちっならば！」

エターナルエッジから、エネルギー刃を飛ばしたが

真耶「当たりませんよ」

軽々とエネルギー刃を全て避け、マシンガンを両手に接近してきた

そう言えば、俺エターナルロープ身に纏ってるの忘れたぜ

ノイズ「エターナルロープにそんな攻撃！」

マシンガン、連射してる山田先生に接近する

真耶「えっ！効かないんですか！？」

驚きながらも、攻撃を止めないとは怖いな。だがその間に、接近しエターナルエッジを振るう

ノイズ「上空に、行く前にけりをつける！」

ひたすら攻撃しまくる。山田先生も、最初は全て避けていたが次第に攻撃が当たり始めた

真耶「これは、まずいですね」

ノイズ「そら！」

蹴り飛ばしたのを利用し、山田先生は上空に向かいアサルトライフルを、俺に発射する

ノイズ「ちい！しょうがない俺も飛ぶか」

サイクロン

ところが、T2サイクロンメモリーを装填した瞬間

ノイズ「え？グレネード？」

ドカアアアン！

前を見てなかった為、グレネードが俺に直撃した

エターナルローブのおかげで、助かったがローブが外れてしまった

ノイズ「まだだ！行くぞ！」

だが、そんなことを気にせずサイクロンメモリーの、風の力を使い
飛翔し爆煙の中から飛び出した

真耶「なっ！」

山田先生が、一瞬硬直したのを俺は見逃さず急接近し

ユニコーンマキシマムドライブ！

T2ユニコーンメモリーを、マキシマムスロットに装填し拳に螺旋
状のオーラを纏わせ

ノイズ「コークスクリューパンチ！」

真耶「きゃああ！」

硬直していた、山田先生をユニコーンのマキシマムドライブで、地面に殴り飛ばした

勝者 ノイズ

とアリーナ内に声が響いた

ノイズ side out

遙「ほう、エターナルが飛べるとは予想外だ」

試合を見た感想は、まずエターナルがサイクロンメモリーの力で、飛んだことに驚きだ

明「いいなあ。俺まだ飛べないんだよな」

確かオーズは、ダジャドルとプティラしか、飛べるコンボはなかったな

宗「まあ、明飛べなくとも何とかなるさ」

明「他人事だと、思って言っなよ」

ノイズ「ふう、ギリギリ勝てた」

喋っていると、ノイズが戻ってきた

明「イヤー、元代表候補生に勝つとは流石ノイズだ」

ノイズ「メモリーの力と一瞬の硬直、そして俺のISの情報があったから、ギリギリ勝てたんだよ」

千冬「よし、では次の試合は私と神行だ」

千冬さんは、そう言っと灰色のISに乗って現れた

宗「さて、行くか」

宗は拳を合わせ

宗「行くぞ雷鳳！」

宗は、第三次スーパーロボット大戦αの、主人公機の雷鳳になり千冬さんの所へ向かった

遙「今度は雷鳳ねえ。雷鳳の格闘が何処まで通用するかな」

宗 side

宗「宜しくお願いします。織斑さん」

織斑「ああ、宜しくな。分かっていると思うが、手加減などしたら呆気なく終わるからな」

織斑さんの身体から、凄い闘気のようなものを感じる

少しでも、手を抜いたら本当に直ぐに負けそうだ

宗「行くぞ雷鳳！」

接近戦で、一気に勝負を決める！

宗「オラオラオラオラオラ！」

蹴り裏拳正拳を、織斑さんに叩き込むが

千冬「その程度か？」

しかし織斑さんは、その場から一步も動かず、全て近接ブレードで弾いていた

宗「強すぎでしょ！」

全力で攻撃してるのに、動かすどころか掠りもしない

宗「やっぱり、出し惜しみしてたら負ける」

一旦距離を取り、両手のプラズマコンバータを合わせプラズマを発生させる

千冬「ほう、それがお前のISの力か？」

宗「ノーコメントで、行くぞカウンターブレイク！」

織斑さんに目掛けて、プラズマを網ように出来るプラズマビュートを放った

千冬「これは、避けざるえないな」

織斑さんは、電撃を避け俺に接近してくる

千冬「その技の発動中は、お前は動けないようだな」

織斑さんは、俺との距離を縮めるが

宗「油断は禁物ですよ。織斑さん」

千冬「何!？」

俺は避けられたプラズマビュートを、操り千冬さんを背後から電撃で捕まえ

宗「そら!」

一気に、俺の所へ引き寄せた

千冬「くっ！この中では上手く動けん」

いや、プラズマの中では普通動けないんですけど

ていうか、プラズマなのに痺れていないのは何故だ？

宗「まあいい。そら！」

そして、すれ違い様に回し蹴りを叩き込んだのだが

宗「手応えがない！まさか受け流された！？」

回し蹴りを決めた筈なのに、全く手応えがなかった

千冬「今のは危なかった。もう少し、腕が動かなかつたらまともに喰らっていたな」

この人の強さは、想像以上だ！というより人間なのか？

千冬「敵の前で、考えるのか？」

宗「なっ！」

織斑さんが、すぐ目の前に来ていた

宗「ハーケンインパルス！」

両足の、プラズマコンバータからからプラズマを打ち出したが

千冬「当たっているのか？」

素早く織斑さんが、左右に移動し最小限の動きでプラズマを回避し、俺の目の前に接近してきた

宗「速い！」

千冬「イグニッションブースト瞬時加速を知らないようだな」

宗「イグニッションブースト瞬時加速ぐう！？」

身体に衝撃が走り、俺はアリーナの壁に吹き飛ばされた

どうやら、織斑さんに近接ブレードで吹っ飛ばされたい

宗「ちくしょう！プラズマコンバータ展開！」

両足の、プラズマコンバータを最大展開し、両足にプラズマを纏わせ織斑さんに接近する

千冬「ほう、かなりの加速だ。だが正面からの攻撃は効かんぞ」

宗「うおお！」

そのままの加速で、連続で拳をみまっただが簡単に受け流される

だが、それでも一瞬ぐらい隙は出来る

そして再度拳とブレードがぶつかった瞬間

宗「今だ！ライティングフォール！」

織斑「何！？」

拳とブレードが、ぶつかる瞬間僅に隙が出来る。その瞬間に、プラズマを纏わせた足で織斑さんをアリーナの壁に蹴り飛ばした

宗「どうだ？ぐっ！」

また、吹き飛ばされ俺はアリーナの壁に激突し

千冬「これで終わりだ」

壁に、激突した状態で斬られまくり

勝者 織斑先生

とアリーナ内に、声が響き俺は負けた

千冬「ふっ、中々の腕だったぞ。だが私にはまだ勝てんな」

宗「そんな、自分何てまだまだですよ。まだ、織斑さんの足元にも

及びません」

千冬「私を、アリーナの壁に蹴り飛ばしておきながらよく言う」

織斑さんは、少し笑いながら俺から離れた

宗 side out

明「まあ、やっぱり負けるよな」

明が、一人納得した顔でそう言った

遙「何で、そんな負けることは分かった顔をしている？て言うか、お前はこの話を知ってるのか？」

明「ああ、知ってるよ。ついでに言うと、あの織斑千冬さんはこのIS世界では世界最強の実力者だよ」

せつ世界最強！？そりゃ勝てる訳ないか

宗「負けた。やっぱり勝てなかった」

明と話していると、宗が此方に戻ってきた

明「まあ、相手が相手だからしょうがないよ」

宗「あの人が強すぎ。量産機じゃなかったら、確実に数分でやられてた気がする」

世界最強相手に、そこそこ戦えてたと思うけどな

まあ、本気出してたかどうかは知らないけど

遙「次は、お前の番だな」

明「まあ、やれるだけやってみよう」

いつの間に装着したのか、明の腰にはオーズドライバーが装着されていたって

遙「& a m p ;ノイズ」お前バースじゃねえのかよ!」

つい、ノイズと一緒にツツコンでしまった

明「え？いいじゃん別に・・・変身」

タカトラバツタ　タ・ト・バ　タトバ　タトバ

仮面ライダーオーズに、変身して千冬さんの所に向かった

明 side

オーズに変身して、メダジャリバー片手に千冬さんの所に向かった

千冬「ほう。ノイズのとは色も見た目も違うが、お前も同じようなISのようだな」

明「まあ、確かに同じようなやつですね」

喋りながら、メダジャリバーにセルメダルを三枚入れスキャンし

トリプル！スキャンニングチャージ！

明「先手必勝！」

メダジャリバーから、闇雲に斬撃を出し攻撃した。あれ？確かこの斬撃、空間斬れた気がしたんだけど普通の斬撃と変わらない。まあいいか

千冬「避けるまでもないな」

千冬さんは、当たりそうな斬撃を全て近接ブレードで弾いたが、闇雲に攻撃した為少し砂塵がまっている

明「これは布石だ！本命はこっちだ！」

スキャンニングチャージをし、俺は上空に飛翔し三つのオーリングを通り、必殺のタトバキックを放った

千冬「当たると思っか？」

明「え！？」

しかし千冬さんはタトバキックを、イグニッションブースト瞬時加速で回避し僕は地面に激突した

明「そんな、必殺技を避ける何て」

千冬「さっきの攻撃は、まともに当たれば大ダメージは避けれんな。だがそれは当たればの話だ」

明「くう！こうなれば！」

チーターのメダルを、出しスキャンしようとした瞬間

真耶「織斑先生！」

しかし、突然山田先生がアリーナ内に入ってきた

千冬「何だ山田先生？試験中だぞ」

真耶「それが・・・」

山田先生が、何か千冬さんに耳打ちをした後

千冬「伊達、悪いが急用が出来た。私は、行かなくてはならないから失礼するぞ」

明「ええ！あの試験は？」

千冬「合格でいいだろう。そもそも、この試験はIS適正を見る為の試験だからな」

まあ、それは知ってるけどねえ

明「分かりました」

千冬「では山田先生、更識と高遠の試合が終わったら各自帰らせてくれ。伊達、お前は他の三人に私は急用でアリーナから出たと伝えてくれ」

明& a m p ;真耶「分かりました」

千冬「それでは、私は失礼する」

千冬さんは、そういつと速足で行ってしまった

とりあえず、僕は変身を解き皆の所に向かった

明 side out

何か山田先生が、千冬さんと話をしたら千冬さんは速足でアリーナを出て行ってしまった

遙「何かあったのか？」

ノイズ「急用でも、出来たんじゃねえのか？」

急用ねえ。まああり得ることだ

明「おーい！」

話をしていると、明がこっちに戻って来た

明「千冬さんは、急用でアリーナを出たからな」

宗「急用？俺達には、関係ないことかな？」

遙一「うゝむ、分からんな」

千冬さんは、忙しそうだから仕事関係かもしれないし、俺達のこと
でかもしれないしな

明「とりあえず、最後は遙一だぞ。相手は、学園最強の生徒会長だ
油断するなよ」

待て。今学園最強と言わなかったか？

遙一「学園最強？・・・何でさ」

そう呟き、俺は更識さんの所へ向かった

楯無「宜しくね♪遙一君♪」

遙一「えっと、宜しくお願いします」

更識さんのISは、アーマー面積が少ない。だがその代わりに、水のドレスのようなものを纏っている。そして、一番気になるのは左右一対の状態で浮いている謎のクリスタル。そして、そのクリスタルからも水のマントのようなものが出て更識さんを包んでいる。はつきり言って、さっきの山田先生のISや千冬さんのISとは全く違う

楯無「早く、IS展開しないと生身で戦うことになっちゃっよ?」

そう言われても

遙一（ただの水じゃないよなありゃ。さて何で行こうかな?）

射撃 格闘 そして万が一に対応した機体・・・なら

遙一「行くぞ!OOライザー!」

刀が光り、俺の身体はOOライザーになった

楯無「遙一君も、他の皆と同じ全身装甲何だね」

遙一「何か、凄い楽しそうですね。更識さん」

楯無「だって、久しぶりに強そうな子達に会えたからさ」

おいおい、こんなに可愛いのに実は裏は戦闘狂か？

楯無「可愛いって言うのは、嬉しいけど戦闘狂ってのは喜べないわね」

また心読まれた

遙「すいません」

楯無「まあ、私に勝てたら許してあげる」

更識さんは、そう言うとかいランスを俺に向ける

遙「負けたら、許してくれないんですか？」

俺もGNソード？を構える

楯無「うん。どうしようかな」

遙一「どうせなら、違う条件にしてくださいよ」

楯無「じゃあ、私を楽しませてくれたら許してあげるわ・・・だから、直ぐに終わらないでね」

そう言った瞬間、更識さんが俺に向かってきた

遙一「速い！だが！」

GNソード？を、ライフルモードにしビームを発射したが

遙一「当たらねえな」

いくら発射しても、回避され全く当たらない

遙一（先読みをしつつ、迎撃するしかないか）

再びライフルを発射する。今度は先読みをし、回避先にも発射したので一応当たったが

楯無「その程度の、攻撃じゃこの水は破れないわ!」

ビームは、水に弾かれ喰らっていない。更に

ガガガガガッ!

遙「ガトリング!?!」

ランスから、ガトリングが発射された為飛翔し回避したが、更識さんはそのままガトリングを連射しながら飛翔した

遙「ちい!」

ライフルと、両肩のバインダーでビームを連射すれが全て水に弾かれる

遙「出力を上げれば、斬れる筈」

両手にGNソード?を持ち、弾幕を上手く抜けながら接近する

楯無「あらあら、弾幕を突破するとわ」

遙「もらった!」

ドライブの出力を上げGNソード?を、更識さんに突き刺すことに成功したのだが

遙「手応えがない!?」

刺したのにも、関わらず全く手応えがない

そう、まるで水を刺しているかのように

楯無「残念でした」

遙「何!?」

目の前の、更識さんが水になり飛び散った

遙「分身!?本体は!?(ピキイン)っは!」

GNソード？を、後ろに振るった瞬間更識さんのランスとぶつかった

遙一「重い、だが！」

再度出力を上げ、ランスを弾きGNソード？をクリスタルに突き刺した後、両肩のバインダーのビームを至近距離で放ち俺は更識さんから離れた

クリスタルは、刺した衝撃で爆発しソードも消えた

楯無「まさか、攻撃を逆に利用してくる何て予想外だったわ」

遙一「自分でも、驚いてますよ。今の行動には」

NTの、力のおかげで今のは何とか出来たが、何も力がなかったら恐らく今で負けていた

遙一「て言うか、まだ本気じゃないでしょ？」

楯無「あらあら、やっぱりばれてた？」

いや、普通に分かるだろう

楯無「でも、攻撃も喰らっちゃったから、そろそろ本気になろうかしら？」

遙一「なら、本気を見せてください。・・・自分も本気でいきますから」

戦うなら、やはり勝ちたい。だが今の俺では勝てない。ならNTの力を、フルに使いこなせば勝てるかもしれない

楯無「さっきまで、ずっと本気だと思ってたけど本気じゃなかったんだ」

遙一「まあ、本当の全力は今から出します」

楯無「なら、おねーさんも本気で行くわよ!」

楯無さんが、ランス片手に接近してくる。さっきより遥かに速い!だが

遙一「負ける訳には、行かない!」

俺も、意識を集中しドライブの出力を上げ接近する

ガガガガガッ！

遙「見える！」

ガトリングを、可能な限り避け無理なものは弾き接近するが

楯無「甘いわよ！」

だが、抜けた先にはランスによる突きの嵐が俺を襲う

遙「速い！」

ランスの、一撃一撃を弾いていくが次第に掠り始め

楯無「そこよ！」

遙「！」

更識さんのランスが、GNソード？を弾き飛ばし俺に向かって来た

遙一「くう！GNフィールドー！」

両肩の、ドライブでGNフィールドを発生し防いだが

楯無「フフフ」

更識さんは、笑いながら俺を見ている。凄く嫌な予感が

そう感じた瞬間、ランスの先端に水がドリルのように渦巻き、GNフィールドに食い込んできた

遙一「まずい！」

GNフィールドが、ドリルに破られ回避しようとしたら、ランスによる一撃を喰らった

遙一「だがこの距離なら！」

すぐ体制を立て直し、GNソード？をソードモードで振るっただが

楯無「外れ」

斬り裂いたのは分身で外れた

遙「其所か！」

ランスが横風ぎに振るわれたが、片手を犠牲にしGNソード？で斬り裂こうとしたが

楯無「残念。まだ近接武器はあるのよ」

GNソード？は、空いていた片手の剣によって防がれ

楯無「終わりよ！」

ランスの突きが迫った瞬間

遙「させるかああ！トランザム！」

当たる前に、トランザムを起動させた

楯無「ISが赤く？でも終わりよ！」

更識さんのランスが俺の身体を貫いた。だが

楯無「え！？」

更識さんの目の前から、俺は粒子化して消えた

遙一「はあああ！」

楯無「きゃあっ！」

粒子化して、ランスの攻撃を回避し背後から、GNソード？で斬り
裂き蹴り飛ばした

遙一「トランザム解除」

トランザムを、解除し更識さんを見る

楯無「今のは、完璧にやられたわね。そのISの力かしら？」

遙「まあ、そんなところですよ。それと、可愛いかったですよ声」

楯無「お、おねーさんをからかわないの！」

いや、だって事実可愛いかったから何だけどなあ

楯無「綺麗な目。さっきとは違う金色の輝きをしてるわね」

どうやら、イノベーターの力を解放した為目の色が金色になっているようだ

遙「次で最後にします」

トランザムを、一時的とは言え使用した為粒子もS・Eも少ない

遙「（そう言えばこの刀）

腰に差してある、待機状態と同じ色形の日本刀

よし、最後は居合い抜きで終わらせる。居合いの構えをし更識さんを見る

楯無「そうね。私も、もうS・Eが残り少ないから。次で最後よ」

更識さんも、ランスを構える

遙「じゃあ尋常に」

遙「&a m p・楯無「勝負！」

同時に、俺と更識さんは接近しランスと刀を振るった

遙「・・・」

楯無「・・・」

現在の状況は、刀を横風ぎに振るった状態の俺と、ランスを突き刺した格好をした更識さんが至近距離にいる状態

そして

勝者 高遠遙一

アリーナ内に、俺の名前が響き渡った

S・Eは残り1

ランスが、直撃する寸前に使える粒子全てを攻撃に使い

ランスの軌道をずらし、尚且つ威力をあまり下げずに更識さんを斬った為ギリギリ勝つことが出来た

もし、粒子が足りずランスの軌道を変えれず直撃していたら俺の負け

もうS・Eが、ほんのちょっと減っていても俺の負け

本当に、ギリギリだったな

遙一「っと危ない危ない」

更識さんは、ISが解除され落ちそうになったので咄嗟に抱き止めた

楯無「ああ、負けちゃった。これで生徒会長の称号は遙一君のものかな？」

遙一「自分、まだ生徒じゃないですからその称号は貰えませんよ」

て言うか、生徒会長とか面倒くさそうだからパスである

楯無「フッフそうだったわね」私のことは楯無って呼んで

遙一「はい。楯無さん」

満面の笑みで、名前を呼んでみた

楯無「うんうん、良い笑顔だししっかり言ったから合格／＼」

何が合格何だ？それに、楯無さんちょっと顔が赤いが大丈夫だろうか？

遙一「えっと、とりあえず降りますね」

現在の格好は、俺が楯無さんをお姫様抱っこしている状態

非常に、目のやり場に困る。その楯無さんスタイルがいいから

楯無「うん。そうしてくれると助かるわ。流石に恥ずかしいしね」

さっさと、俺は降りて楯無さんを降ろしISを解除した

真耶「高遠君 更識さん！」

山田先生が、走りながら俺と楯無さんの所へ来た

遙「どうかしました。山田先生？」

真耶「えっと、試験はこれで終わりですからもう帰ってもらっても構いません。皆さん、もう遙一君達の試合が終わった後帰ってますから」

何？アイツ等俺を置いて帰っただと！

真耶「入学に、必要な物は後日全て送りますので、無くさないようにしてくださいね。一応、織斑先生の家にいると聞いたので、織斑先生のお宅に送りますね」

遙「分かりました」

真耶「それでは、私もこれで失礼しますね」

山田先生は、そう言つとまた走つて行つてしまった

遙「それじゃあ、楯無さん。また入学の式の日に会いましょう」

楯無「うん。またね遙一君」

遙「ではGood Luck楯無さん」

俺はそう言つた後、着替えを済ませて一夏の家に戻り休んだ

介入者VS教師と生徒会長（後書き）

次回はいよいよISS学園入学です

では次回も宜しくお願いします

介入者IS学園に入学（前書き）

はい今回でやっと四人は入学します

では宜しく願います

介入者IS学園に入学

遙「ああ、だるい」

ノイズ「授業、絶対受けるの面倒くさいよな」

宗「でも、聞いてないと怒られるしな」

明「いいじゃん。周りは全員女の子とか超笑えるじゃん」

俺達四人は、現在廊下に立っている。何故かというと、千冬さんに此所で待っていると言われたからだ

正直言うと、明以外は全員テンションが低い。理由は、勿論授業を受けないといけないからだ

遙「お前等そう言えば、あの辞書より厚そうな参考書読んだか？」

ノイズ「読んだに決まってるだろ」

宗「読まないと、全然授業にもついていけそうにないしな」

明「僕も、千冬さんに殴られたくないから読んだよ」

やはり全員読んだのか。俺？勿論読んだに決まってるだろ。怒られないからな

そんな、下らないことを話していると

千冬「お前等入れ」

4人「はい。失礼します」

千冬さんに呼ばれたので、俺達は全員1年1組の教室に入った

一夏side

くそ！何で俺がこんなめに。偶々触ったISが動いたせいで、周りは全員女子のIS学園に入学することになる何て

いいよな遙一わ。今頃家で寛ぎながらテレビでも見てるだろうから

それに比べて俺は、朝から千冬姉に何回も殴られるし、周りからはじろじろ見られるし

全く、変わってもらいたいぜ。この集中する視線何かも全てな

千冬「さて、では授業を始める前に諸君等の他に、このIS学園に入学し同じクラスになった奴等を紹介する」

そう言つと、周りはざわめき出し千冬姉はドアを開き

千冬「お前達入れ」

4人「はい。失礼します」

そう言つて、中に入って来たのは何と4人の男！それに先頭にいるのは！？

一夏「よっ遙ー！？」

俺は立ち上がり、そう言つてしまった

一夏 side out

教室の中に入ると、騒がしかったのが一瞬で静かになった。更に

一夏「よっ遙ー!？」

真ん中の、一番前にいた一夏が立ち上がり、俺の名前を呼んだ瞬間

パシィィン!

一夏「痛!」

千冬「いきなり、立ち上がるな馬鹿者!」

見事に、千冬さんに出席簿で殴られた

一夏「すっすいません」

一夏は頭を抑えて座った。あれはかなり痛そうだ

千冬「さて、それじゃ4人共自己紹介をしろ」

おっと、最初は俺からか

遙「高遠遙一と言います。趣味は、居合い抜きとお喋りです。こんな俺ですが、皆さん気軽に話し掛けてください」

居合い抜きは嘘だが、一応刀差してるから言っておいた

千冬「では、次ノイズ」

ノイズ「名前はノイズと言います。趣味は、カードゲームをやることです。一年間宜しくお願いします」

ほう、まだノイズはカードゲームをやっていたのか

千冬「次は神行」

宗「神行宗と言います。趣味は読書です。宜しくお願いします」

趣味は読書ねえ。知らなかったな

千冬「伊達で最後だ」

明「伊達明って言います。趣味は、特にないけど彼女募集中だから、気軽に告白待ってるよ」

おいおい、自己紹介でそんなこと言っているのかよ？

ところで、何でさっきからこんなに静か何だろうか？

この学園の女子は、全員大人しい奴等なのか？

女子「キャッ」

ピキイン！何か非常に嫌な予感が

女子1「きゃああああ！！男子しかも4人！」

女子2「全員、普通だけど其処がまたいい！」

女子3「伊達君！付き合ってください！」

な何て五月蠅いんだ！たかが、男子が四人増えただけだろ！？

て、普通そんなことはあり得ないからこうなるのも無理はないか

ていうか、何か一人明に告白してるぞ！？

明「今告白してくれたの誰かな？候補に入りたいから、後で僕に言
ってね」

明は、手を振りながらそれに答えているよ。チャラ男かよ

千冬「静かにせんか！」

だが、騒いでいた声は千冬さんの一声で完全に沈黙した

千冬「全く、お前達は静かに聞いてられんのか！とりあえずお前等
四人は空いている席に座れ」

と、千冬さんは言っているがこのクラス空いてる席が多くないか？

まさか、まだ転校生か何かが来るから空いてるのか？

まあ、今気にしてもしょうがないか。とりあえず俺は、一番後ろの空いてる席に座り、アイツ等が何処に座ったか見てみると

明は、一番前の左から二列目の先頭に座り、ノイズは俺の斜め前の隣が空いている席に座り、宗は金髪の奴の隣に座っていた

千冬「よし、全員席についたな。では授業を始める。山田先生頼みます」

真耶「はい」

それから一時間、俺は退屈な授業を受けた

真耶「それでは、授業を終わります」

一時間後、授業が終わったので一応隣の女子に挨拶する。隣の奴は、髪型は凄く短いツインテールでだぼだぼの制服を着てる。しかも完全に腕が袖に隠れている

遙「高遠遙一だ。宜しくな」

？「うゝん宜しくねゝ。私の名前は布仏本音だよゝたつかー」

のほほんとした、喋り方で何か癒されるな。それに、けっこうタイブかもしれない。けどたつかーって

遙「いきなりあだ名かよ。なら君はのほほんさんだな」

何でかって？そりゃのほほんとしてるからさ

のほ「おゝ、たつかーもいきなりあだ名で呼んでくれたねゝ」
やはり非常に癒されるな

遙「じゃあ、ちょっと俺は一夏の所に行くから」

のほ「うゝん行つてらしゃゝい」

のほほんさんに、そう言い俺は一夏の所に向かう。途中で、ノイズと宗を見たがノイズは居眠りをし、宗は本を読んでいた

明「色々、大変だよねえ僕達」

一夏「ああ、全くだよ」

一夏の所へ行くと、既に仲良くなったのか明と話していた

遙「よう一夏」

一夏「ああ遙。お前、入学するんだったら俺に教えてくれよ」

やはり、言わなかったことに怒っているようだ

遙「まあそう言っな。どうだ驚いたろ？」

一夏「驚くに決まってるだろ」

明「驚いて、寿命は何年くらい縮まった？」

一夏「百年くらい、縮まったな」

遙一「そりゃ大変だな」

などと、他愛ない会話をしていると

箒「ちょっと、いいか？」

何か、知らない女子が喋りかけてきた

遙一「誰だ？」

箒「おつとすまない。私の名前は、篠ノ之箒と言つ」

篠ノ之？ISのコアを、製造したのは確か篠ノ之束だったな。その妹か

一夏「箒。六年ぶり久しぶりだな」

どうやら、一夏は篠ノ之を知っているようだ

第「ああ、久しぶりだな一夏。すまないが、明を少し借りるがいいか？」

明を借りる？ほう、もう明は手を出していたのか

一夏「構わないけど、二人共知り合いなのか？」

明「そりゃ、入学するまで一緒にムグッ！」

明が、何か言おうとしたが篠ノ之が明の口を抑えた

第「なっ何でもない！じゃじゃあ借りるからな」

篠ノ之はそう言うと、明の口を抑えたまま行ってしまった

と言っか今更だが

遙「どんだけ、廊下にいるんだよ」

廊下には、数えきれない程の女子が教室の中を見ていた

そしてその中には

楯無「」

確か楯無さんだったな。あの人も人ごみの中にいた。ていうか

遙一（あの人、俺に手降ってないか？）

完全に、俺を見ながら手を降っている気がするが気のせいだよな？

そんなことを、思いながら俺は席に戻った

明side

はいはい明です。俺は現在箒と一緒に屋上にいます

明「何だよ箒？話なら教室でも出来るだろ？」

箒「お前は、何故私の隣に座ったんだ！？」

え？そんなこと言う為に屋上に来たのかな？

ていうか、本来一夏と一緒に来る筈なのに何で僕が来てるんだろう？

明「それは、箒の隣が空いてたからに決まってるじゃん」

箒「別に、私の隣じゃなくてもよかっただろ」

明「別にいいじゃん」

箒「それと、自己紹介のあれは何だ？」

自己紹介のあれ？ああ彼女募集中のことか

明「だって募集中だし、言っちゃ駄目だった？」

箒「そっそう言う訳ではないが／＼」

顔が赤いな。こりゃフラグ立てるのに成功したかな？

明「それとも、箒が彼女になつてくれる?」

箒「ばっ馬鹿な事を言つな!／／」

うゝん結構本気何だけどなあゝ。やっぱ駄目か

明「まあまあ、そう怒らないの可愛い顔が台無しだよ」

そう言い、僕は箒の頭を撫でた

箒「なっ何をしている!／／」

明「何って、頭撫でただけだよ」

箒顔真っ赤。うゝん可愛いなあゝ

明「それと」

箒「なっ!／／」

僕は、そつと箒を抱きしめ

明「僕は、何時でも箒の味方だからな」

などと、格好つけて言い直ぐに離れた

キンコーンカーンコーン

おつと、丁度予鈴がなつたな

明「予鈴だな。千冬さんに殴られたくないから急いで戻ろう箒」

固まっている箒にそう言い、僕は箒の手を握って歩き出した

箒「なっ！明ひ一人で歩けるから手を離せ！／＼」

明「細かいことは、気にするな」

箒の言ったことを、軽く流し僕と箒は教室に戻った

明 side out

遙「ああ、だるいし面倒くさいな」

またISの授業、正直座って授業を聞いているのは退屈である

隣の、のほほんさんを見てみると真剣に授業を聞いているようだ

のほ「たっかー、どうかした？」

のほほんさんが、俺に気付いて聞いてきた

遙「いや、よくちゃんと聞いてられるなと思って」

のほ「覚えないと、大変だからね」

遙「真面目だな」

俺は、そう言った後前を見る。他の奴等はと言うと、ノイズも宗も

明も真面目に、ノートを取りながら聞いているようだ。一夏は言う
と

真耶「分らないところが、あったら言ってくださいね。何せ私は
先生ですから」

山田先生が、一夏を心配したのか一夏に聞いていた

一夏「はい。先生」

真耶「はい。織斑君」

さて、一夏は何処が分からねえんだか

一夏「ほとんど全部、分かりません」

阿呆だ。一夏、お前自分で馬鹿ですって言うてどうすんだよ

参考書読んでは、何も分からない何てことはない筈だが、残念な
がら参考書は、雑誌と一緒に俺が捨てたから読めなかったんだがな

千冬「織斑、入学前に参考書を読んだか？」

千冬さんが一夏に聞く

一夏「あの、電話帳ぐらいある分厚いやつですよね？」

千冬「そうだ。必読と書いてあった筈だが」

一夏「えっと、古雑誌とかと一緒に捨てました」

パシィイイン！

見事に、出席簿で一夏は殴られた

ちなみに俺は、捨てる時に気がついたが気にせず捨てた

千冬「必読と、書いてあっただろうが馬鹿者。うん？待て、ゴミを捨てるのは高遠の仕事だったな？お前は、気がつかなかったのか？」

今度は、出席簿片手に俺の所に来て聞いてきた

遙「気付いてましたが、こんな感じに面白いことになると思って捨てました」

ピキイン 来る！

ガシッ！

俺は、出席簿攻撃を右手で掴みガードした

千冬「ほう、気付いていて捨てたのか高遠」

遙「織斑先生。暴力はいけませんよ」

笑いながら、言っているが千冬さんの顔は非常に怖い

ピキイン また来る！

ガシッ！

今度は、チョップを腕を掴んでガードした

千冬「ほう、二撃目も防ぐとは正直思わなかったぞ」

NT 嘗めんなよ。だが

遙一（何て力だよ）

段々、掴んでいる手が震えてきた。力強すぎだろ！

千冬「ふつまあい。織斑、再発行してやるから一週間以内に覚えろ」

千冬さんは、そう言う文教卓のほうへ戻って行った。はあ、何とかギリギリ助かった

一夏「ええ！流石にあれだけの厚さを一週間じゃ」

千冬「やれと言っている」

一夏「はっはい。やります」

一夏は、千冬さんに睨まれやると言ってしまった。可哀想に

千冬「分からないところは、高遠に教えてもらえ」

何？俺が教えるだと

遙一「織斑先生、それって俺に拒否権はありますか？」

千冬「ある訳がないだろ。お前の所為でこうなったんだからな」

く！逆に墓穴を掘ったか。畜生

千冬「では、授業を再会する前にノイズ、今私が一夏に、分からないところはどうしろと言ったか答えてみる」

？何で、ノイズにそんなこと聞くんだ

ノイズ「え！？えっと、遙一に分からないところを教えてもらえと言っていました」

千冬「以外に、ちゃんと聞いていたようだが居眠りはするな」

ノイズ「はい。すみません」

どうやら、居眠りしてたから指されたようだ

千冬「では、山田先生授業の続きを」

真耶「はい。じゃあ次は」

授業が再会されたが、正直早く授業終わってほしいぜ。そんなことを、思いながら俺はまた退屈な授業を聞いたのだった

介入者IS学園に入学（後書き）

次回はキャラ設定か、クラス代表決めです

では次回も宜しくお願いします

クラス代表&副代表決め（前書き）

はい、今回は代表と副代表決です。

では今回も宜しくお願いします。

クラス代表&副代表決め

一夏「全く分からねえ」

宗「とりあえず、焦らず覚えれる範囲で覚えていけ」

ノイズ「焦って覚えても、直ぐに忘れるしな」

明「えっと、PICはだな・・・」

現在俺達は、一夏にISの分からないところを教えている

一夏は、一週間以内に覚えろと言われた所為で焦って覚えようとするし

遙「文章全てを、覚えようとするな。要点を言うからそれを覚えろ」

全く面倒くさいな。まあ、墓穴を掘った俺がいけなかったんだがな

？「ちよっと、宜しくて？」

5人「はい？」

何か、知らない金髪の女子が話し掛けてきた為、俺達は声を揃えて返事をした

と言うか、今C・Cの声だったな

見た感じは、まあ可愛いのか？金髪で、ウェーブのかかった髪をし、自分は特別みたいなオーラを出している感じがする

ウェーブのかかった、髪の本がドリルに見えるのは、俺の気のせいだろうか？

宗「宜しくないから、どうでもいい用事なら後にしてくれ」

しっしつと、手を振りながら答える宗。完全に邪魔者扱いだな

ノイズ「今一夏に、教えてるから後にしてくれないか？」

まあ、普通に後にくれと言うノイズ

明「うゝん、僕に用があるなら後にしてね」

この阿呆は、また馬鹿なことを言っている。篠ノ之が、凄い顔で睨んでるぞ

一夏「悪いけど、後にしてくれないかな？」

一夏も普通に言う

遙「悪いが、後にしてくれ」

何か、見た感じうざそうだから関わらないのが一番だな

？「まあ！なんですのそのお返事。私に、話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

はあ？うざい。何だ？このムカつく程の上から目線の奴はよ

ノイズ「まずさ、君誰？」

ノイズが金髪ドリルに聞く

？「私を知らない？ このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

キヤラは、C・Cと全然違うようだ。と言うか、どんだけ自分が凄いと誇示したいんだか

一夏「ああ、一ついいか？」

何か、一夏が質問があるみたいだ。頼むから、馬鹿なことを言わないでくれよ

セシ「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一夏「代表候補生って何？」

ガタガタッ！

俺達含めて、聞いていた奴等全員がずっこけた

遙「はあ、一夏代表候補生とは国代表の候補者の一人だ」

簡単に説明する

一夏「えっと、つまりエリートってことか？」

セシ「そう！エリートなのですわ！」

エリートねえ。ただ五月蠅いだけのドリルじゃない？

セシ「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡、幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

5人「そうか。そりゃけっこう、いやかなりラッキーだな」

声を揃えて、馬鹿にしてみる俺達。と言うかスゲー棒読みだな。もうちょっと、わざとらしくないように言っべきだったな

セシ「・・・あなた達、馬鹿にしていますの？」

遙「「していただけますのじゃなくて、してるんだよシルビア・オットツトさん」

セシ「私の名前はセシリア・オルコットですわ！」

あれ間違えた？車の名前と、お菓子の名前で覚えたんだが失敗したか

セシ「大体、あなたはISについてなにも知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。あなた方四人は、少しは知識があるようですが、テレビにまで出たあなたが何も知らないとは期待はずれですわ」

一夏を、指差しながらドリルが言う

一夏「いや、俺に期待何かされてもな」

ノイズ「そうだな。こんな、参考書捨てたような奴に期待何かしちや駄目だ」

ノイズ、何気に酷い事言ってるよな

一夏「ノイズ、其処まで言わなくてもいいだろ」

ほら、一夏が怒ってるじゃないか

セシ「私を、無視しないでいただけませんか！ふん。まあでも？私は優秀ですから、あなた達のような人間にも優しく接してあげますわよ」

宗「隣で、睨んでる奴が優しく接する？何言ってるんだお前？」

ああそう言えば宗の隣はドリルだったな

セシ「別に、私は睨んでいた訳ではなくてよ。ただ、あなたを観察していただけですわ」

観察していた目が、睨んだ目になっていたことが、分かってないよ
うだな

セシ「まあ、私は入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。ISについて、分からないところがあれば、泣いて頼まれたら教えてあげてもよくつてよ？」

一夏「いや、別に遙一達に頼むからいいよ」

一夏は普通に断る。泣いて頼む何て普通しないしな

遙一「君に、泣いて頼むぐらいなら楯無さんが、のほほんさんに頼むよ」

明「僕も箒に頼むよ」

明は、そう言っていると篠ノ之を見てた。篠ノ之は、若干顔を赤くし顔を反らしていた

宗「わざわざ、君に頼むなら織斑先生に頼むよ」

ノイズ「俺も、織斑先生か山田先生に頼むな」

全員、セシリアの申し出を拒否した。誰か、一人ぐらい教えてくれと言ったら面白かったのに

一夏「て言うかさ、教官なら俺も倒したぞ」

一夏が、思い出したように言う。流石主人公やはり倒していたか

セシ「わ、私だけと聞きましたが!？」

一夏「女子だけではってオチじゃないのか？」

まあ確かに、俺は教官と違うがノイズは山田先生倒してるからな

セシ「あ、あなた方も教官を倒しましたの!？」

何か、ドリルがあり得ないと言つような顔で俺達を見る

ノイズ「俺は倒した」

宗「俺は敗けた」

明「僕は、途中で教官帰っちゃったから一応勝ちだね」

遙「俺は、倒したのは教官じゃない。そして、少し落ち着いたらどうだ？」

セシ「こ、これが、落ち着いていられますか!」

キンコーンカーンコーン

ナイス！いいところで予鈴が鳴った

セシ「また来ますから、逃げないでくださいね！」

そう言っていると、ドリルは自分の席に戻った

遙「敢えて言えば、もう来ないでほしいな」

4人「ああ、そうだな」

俺の言ったことに、全員頷いた後俺達は自分の席に戻った

千冬「それでは、この時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する。・・・ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表と副代表を決めないといけないな」

クラス対抗戦の、代表と副代表ねえ。出れば強い奴等と戦えるのか？

千冬「クラス代表と副代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長と副長だな。ちなみにクラス対抗戦では、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると、一年間は変更が無いからそのつもりでいろ」

でも、意外に面倒くさそうだな。まあ、推薦されたらやるとしよう

明「はい織斑先生！」

説明を、聞いた瞬間に明が手を挙げた

千冬「推薦か？なら名前を言え」

明「僕は、織斑先生がいいと思います！」

シーン

教室内が一瞬静まり

ゴツンッ！

明「痛いです。先生！」

明の頭に、千冬さんの拳骨が炸裂した

千冬「馬鹿者！教師を推薦する馬鹿が何処にいる！」

明「此所にいるぞー！」

ゴッソッ！

明「痛！織斑先生角は、角はいけませんよ！」

馬鹿なことを言った為、今度は出席簿の角で殴られてるよ

千冬「馬鹿なことを、言うからだ」

千冬さんは、そう言うて教卓に戻った

明、お前絶対にこうなると分かっててやったな。本当、明は何を考
えてるのかよく分からん

千冬「誰か推薦はないか？自主推薦も構わんぞ。ついでに言うておくが、推薦された者に拒否権はないからな」

千冬さんが、そう言うとか脅迫に聞こえるのは俺だけか？

のほ「はい。織斑先生」

意外なことに、隣ののほほんさんが手を挙げた

千冬「布仏か。で誰を推薦するんだ？」

のほ「私は、たっかーを推薦します」

のほほんさん、この俺を推薦するとわ

第「じゃ、じゃあ私は明を推薦します！」

俺の推薦の後、篠ノ之が手を挙げ明を推薦した

鷹月「私は、織斑君を推薦します！」

青い髪の、優等生の鷹月さんが一夏を推薦する

女子1「じゃあ私はノイズ君を推薦します!」

女子2「私は神行君を推薦します!」

後は、他の女子二人がノイズと宗を指名した

千冬「他にはいないのか? いないのなら、高遠遙一 伊達明 織斑
一夏 ノイズ 神行宗の五名の中から決めるが?」

この時点で、俺を含めて五人の候補か。どうやって、二人に絞るんだ?

セシ「納得がいきませんわ!」

何かいきなり、ドリルが両手で机を叩きながら立ち上がった

セシ「そのような、選出は認められません! 大体、男がクラス代表

だなんていい恥さらしですわ！私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

五月蠅い奴だな。別に屈辱じゃねえだろ

セシ「実力から行けば、私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！私は、このような島国までISの修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

これは挑発か？それとも本気で言ってるのか？ちなみに、ドリルの隣の宗は耳を塞いで話を全く聞いていない

セシ「いいですか！？クラス代表とは、実力トップになるべき、そしてそれは私ですわ！」

まあ、確かに実力トップがなるべきだな。だが、自分でトップと言うのはどうかと思うがな

セシ「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、私にとっては耐えがたい苦痛で・・・」

バタンッ！

一夏「イギリスだって、大したお国自慢無いだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ！」

一夏が、立ち上がりドリルを見ながら言う

セシ「あ、あなた私の祖国を侮辱しますの！」

ドリルが、一夏を睨みながら言う

明「へー。イギリスは不味い料理の覇者何だ。筈知ってた？」

だが、いきなり明が篠ノ之と会話を始めた

筈「は？当たり前だ。明は知らなかったのか？」

明「ちょっと、ニュースとかあんまり見ないから知らなかったよ」

明、この緊迫した状況を何とかしたかったから、こんなこと言うてるのか？

セシ「ふん。やはり極東の猿は、その程度のこと知らないようですわね」

遙一「おーい。その程度のことって、イギリス人のお前が、大して気にしてないみたいに言っているのか？それとも、本当に不味い料理しかイギリスにはないのか？」

俺も会話に加わる。少し弄ってやろう

セシ「お、美味しい料理はちゃんと祖国にもありますわ！あなたも私の祖国を侮辱しますの！」

別に、侮辱した覚えはないんだけどな

遙一「まあまあ、シルビア・ドリルトさん。そう怒らないで落ち着いて」

セシ「私の名前は、セシリア・オルコットですわ！何度言えば、分かるんですの！」

遙一「じゃあ、後百回ほど言ってくれオットットさん」

笑いながらそう言った瞬間、ドリルの顔が真っ赤になり

セシ「決闘ですわ！」

机を叩きながら、俺を睨みドリルが大声で言う

遙一「え？何で決闘？そこは、百回自分の名前言つとこだろ」

セシ「何処まで、私を馬鹿にすれば気が済みますの！」

何処まで？別に何処までもかな？だが

遙一「敢えて言えば、飽きるまでだ。それと、決闘は勿論やらせてもらつよ」

一夏「俺も、その決闘やらせてもらつぜ」

宗「俺もな。隣で、耳障りなことを言い続けた代価を払ってもらつ」

ノイズ「興味ないけど、やってやるか」

明「フッフ、僕も参加させてもらつよ」

ノイズ意外、全員やる気満々のようだな

千冬「お前達、残念ながら全員で模擬戦をするほど時間は取れん。精々二人が限度だ」

つまり、俺達の中から二人だけドリルと戦えると言ったことか

遙「やはり、公平にこれしかないよな？」

俺はそう言い手をグウの手で出す

4人「ああ！」

真耶「ええ！ここで喧嘩をする気ですか！？」

遙「行くぞ！」

そして、俺達は拳を振りかぶり

5人「ジャンケンポン」

ジャンケンを始めた

ガタガタッ

？何故か、何人かその場にずっとけたが気にしない

ピキイン ふっ次で決める

5人「あいこでしょ！」

遙「ハハハ、一抜けだ」

3人「しまった！アイツNTだった！」

結果は、俺一人がチョキで後は全員パー。フッフ今更気付いても遅い

4人「くそ！ジャンケンポン」

一夏「よし！」

今度は、一夏一人がパーで後全員はグウ

明「チエッ！」

ノイズ「しくつたな」

宗「無念」

三人は、自分の手を見て悔しがっている

遙一「さて、君の相手は俺と一夏でさせてもらっよ」

俺と一夏はドリルを見る

セシ「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い。
いえ、奴隷にしますわよ」

遙一「言ってくれるねえ。なら俺が勝ったら、何でも言うことを聞いてもらおうか」

一夏「俺も、遙一と同じだ！」

セシ「構いませんわ！そんなことは、万に一つあり得ませんので」

フッフ、その自信をぶち壊してやるよ

勝ったら、このドリルをどうしてやろうかな？

一夏「ハンデは、どのくらいほしい」

一夏が、いきなり馬鹿なことを言い出した。お前、初心者が何を言ってるんだ？

セシ「あら、いきなりお願いですか？」

一夏「違う。俺と遙一がどれくらいつけるかだ！」

一夏がそう言った瞬間、クラス内の女子が大声で笑い出した

女子1「織斑君。それ本気で言ってるの？」

女子2「代表候補生に、ハンデをつける何て自殺行為だよ？むしろハンデもらうほうがいいのに」

一夏「・・・ハンデは無しでいい」

女子に色々言われて、一夏はハンデを無しにした

千冬「さて、話は纏まったな。それでは勝負は一週間後。第三アリ
ーナで行う。高遠と織斑とオルコットは、それぞれ準備をしておく
ように。では、五人共席に着け。授業を始める」

フフフ、面白いことになったぜ。こんな感じで、どんどん面白いこ
とになってほしいな

そんなことを思いながら、俺は授業を受けた

クラス代表&副代表決め（後書き）

次回は、部屋決めと特訓です。

では次回も宜しくお願いします。

部屋決め（前書き）

今回は部屋決めと翌日の朝の話です。

では今回も宜しくお願いします。

部屋決め

一夏「くそー！何でこんなに、ISってややこしいんだ？」

遙「それはお前が、焦って覚えようとするからだ」

放課後、俺達はまだ一夏にISについて教えていた

宗「だが、最初よりは十分覚えてきたな」

宗の言う通り、何だかんだ言いながらも、一夏はしっかり覚えてはいた

ノイズ「これだけ教えて、何も覚えなかったというのはないのか。つまらないな」

ノイズ。お前は一体、覚えてほしいのかほしくないのかどっち何だよ？

明「綺麗な山田先生。僕と一緒に、デートでもしませんか？」

真耶「き綺麗何て言っても、駄目ですよ。まだ私と伊達君は、そういう関係じゃないんですから！」

明は、山田先生を口説いているようだ。と言うか、お前には篠ノ之がいるだろ

千冬「男子は、全員いるようだな」

そう言つて、千冬さんが教室に入ってきた

遙「織斑先生、俺達に何か用ですか？」

千冬「ああ、お前達に寮の部屋を決めてもらおうと思つてな」

あれ？確かまだ、部屋は用意出来ないって、前に言われた気がするんだが？

一夏「この前聞いた時は、まだ部屋は用意出来ないから、一週間は自宅通学つて聞きましたけど？」

千冬「政府から、通達があつてな。無理矢理、部屋を用意した」

政府からの通達。恐らく、マスコミ対策と俺達が他国に誘拐でもさせない為の処置だろう

男のIS操縦者など、他国からすれば喉から手が出るほど欲しいだろうからな

主に、モルモットとして研究するにわ

一夏「政府から？何ですか？」

コイツは、馬鹿過ぎて頭が痛くなる

宗「一夏、俺達は男で唯一のIS操縦者だ。他国は、そんな俺達を喉から手が出るほど欲しい筈だ。そんな状況の中で、学園の外に出てみる。他国の奴等に捕まって、モルモットにされるぞ」

俺の思っていた通りのことを、宗が一夏に教えていた

と言っか一夏、それくらい分かるようになれよ

千冬「さて、とりあえず部屋の鍵だ。早い者勝ちだからな」

そう言うと、千冬さんは鍵を置いた。あれ？何か鍵の数が、一つ足りないような気が？

千冬「高遠、お前はこの部屋だ」

そう言つて、千冬さんは俺に1055と書かれた鍵を渡してきた

遙「え？あの、自分に選択権はないんですか？」

千冬「ない」

きつぱり言われた。何故だ？何故何だ！？

まあ、とりあえず鍵はもらつておく

明「先生！質問があります！」

山田先生を、口説くのを止めて鍵を見ていた明が、千冬さんに言う

千冬「何だ伊達？」

明「幕と、同じ部屋の鍵はどれですか？」

また明は、阿呆なことを言っている。そんなの、答えてくれる訳ねえだろ

千冬「なら、この部屋の鍵を持っていけ」

ええ！千冬さんは、明の言ったことに答えるように、1025と書かれた鍵を明に渡していた

おい！いいのかよ。其所は普通、叱るか鉄拳制裁だろ！

明「ありがとうございます」

明は、嬉しそうに鍵をもらっている

千冬「後の三人も、早く決めろ」

何か、スゲー適当に決めさせてるがいいのか？普通こっいつのは、

教師が決めるもんだろ

ノイズ「俺は、一人になりたい気分だからこの鍵をもらっ」

ノイズはそう言い、1040の鍵を取った

一夏「じゃあ、俺と宗が同室か」

宗「だな」

一夏と宗は、余った1041と書かれた鍵を取った

流石に、一人じゃ退屈だと思ったからか？

千冬「ああ後、一応大浴場はあるが分かっていると思うが、お前達は使用不可だから部屋にあるシャワーを使え」

そりゃそうだろうな。ほぼ、女子しかいないんだから俺達が入れる訳がない

一夏「え？何ですか？」

頭が痛い。一夏お前まず考える。てか何故分らない？

ノイズ「一夏、お前女子と一緒に風呂入りたいのか？人はそれを変態と言っただぞ」

ノイズが、呆れながら一夏に言う

真耶「お織斑君、女子と一緒に風呂に入りたいんですか？だ駄目ですよ！」

何故か顔を赤くしながら、山田先生も一夏に言う

一夏「は入りたくありません」

真耶「ええ！女の子に興味がないと言うのもそれはそれで・・・」

何か、山田先生がおかしくなった

明「山田先生！僕、女の子に余り興味がないんで一緒に風呂につて痛！」

千冬「伊達、馬鹿なことを言うなよ。それと、くれぐれも一緒に入ろうなどするなよ」

千冬さんの、出席簿アタックが明に炸裂した

明「は、はい分かっています」

千冬「さて、後お前達の荷物は織斑意外は全て持ってきておいた」

千冬さんはそう言うと、教室の隅に置いておいた俺達の荷物を持ってきた

ちゃんと、俺の相棒もあるな

一夏「えつと織斑先生、俺の荷物は何を持ってきたんですか？」

千冬「着替えと、携帯の充電器があれば十分だろ」

少ないなあ。本当に、必要最低限の物しか持って来なかったようだな

千冬「では、各自部屋に行け」

5人「分かりました」

俺達は、それぞれの部屋に向かった

明side

どうもどうも、伊達明です

はい、自分は現在1025の部屋にいます。恐らくそろそろ

第「誰かいるのか？ああ、同室の者か」

明「あ！来た」

第「こんな格好ですまない。シャワーを使っていたものでな。私は篠ノ之「第」なっ！この声は！？」

はい、扉を開けて第が来ました。格好は勿論、バスタオル一枚で髪

をおろした状態。原作通りだぜ！

箒「あ、明！／／／」

明「やあ♪相変わらず綺麗だね箒♪」

箒「み、見るな！何でお前が此所にいる！？／／／」

明「此所が、僕の部屋になったから。それとさ箒頼みがあるんだ」

箒「な、何だ？／／／」

身体を、腕で隠そうとしてるけど逆にラインがしっかり見えて、逆効果になってるよ

明「抱きしめさせてください！」

箒「な！だ、駄目に決まってるだろ！／／／」

箒はそう言っと、木刀を持ち僕に構える

箒「成敗！」

箒が原作通り、木刀片手に突っ込んで来たよ

ゲシッ

箒「な！」

そして僕は、回避せずに額で突きを受けた

明「痛たた。まずは落ち着こうね箒」かくっ

箒「あ、明！？大丈夫か明！？」

衝撃が、思ったより強く僕は意識を失いながら箒に倒れこんだ

明「うゝん。あれ？」

箒「気が付いたか明？」

ベットの上で目覚め、目の前には剣道着姿の箒がいた

明「えっと、ごめんな箒。重かつたろ？」

箒「謝るのは、私だ。お前に怪我をさせてしまった」

そう言われて、額を触つてみると

明「痛！」

額には、包帯が巻かれてるようだ。触ったら勿論痛かった

箒「血が出ていたから、巻いておいた。まだ触らないほうがいい」

明「箒はやっぱり優しいね、ありがとう」

箒「わ、私が怪我をさせたんだから、それぐらいやるのは普通だ／＼」

箒顔真っ赤。可愛いなあ。抱きしめたいなあ。

篤「そ、それよりお、お前から私と同室になりたいと言ったのか？
／／／」

明「うん。当然！」

篤「そ、そうか／／／」

明「とりあえず、一年間宜しくねえ」篤」

篤「あ、ああ。宜しくな。と、とりあえずまずはシャワーの時間だ
が」

明「別にそういうのなら、篤が全部決めていいよ」

正直、決めるの面倒くさいし

篤「そ、そうか。じゃあシャワーの使用時間は、私は七時から八時。
明は八時から九時からだからな」

明「分かったよ」

こんな感じで、額に怪我をしたが何とか筭と同じ部屋になりました

明side out

ノイズside

ノイズ「お邪魔します」

俺は、1040の部屋に入った。ふつ、人の気配がない俺は当たりのようだな

それにしても、IS学園の寮は凄いな。でかいダブルベッド二つに机、椅子、キッチン、冷蔵庫、トイレ、シャワー、クローゼット冷暖房完備とはホテル並だな

ノイズ「はあゝ。シャワー浴びて寝るか」

眠くなってきた為、シャワーを浴びて俺は眠った

ノイズside out

宗 side

俺と一夏は、ノイズと別れ隣の部屋に入った

宗「ああ、今日は疲れたぜ」

俺は、奥のベットに倒れ込んだ。全く、初日からけっこう疲れてしまったよ

一夏「本当疲れたよ」

一夏も、ベットに倒れ込んでいた

宗「まあ、一夏。改めて一年間宜しくな」

起き上がり、一夏に右手を出す

一夏「ああ。こっちこそ宜しくな」

握手をし、また俺はベットに倒れた

一夏「シャワーどうする？先に使うか？」

宗「そうだな。じゃあ、先に使わせてもらっ

一夏「分かった」

俺はシャワーを浴び、一夏と少し喋った後明日に備えて眠った

宗 side out

遙「ああ、だるいし眠い。さっさと眠りたい」

だが、部屋に漸く到着しドアを開けた瞬間

楯無「お帰りなさい。ご飯にする？お風呂にする？それともわ・た・し？」

目の前に、裸エプロン姿の楯無さんが現れた

遙「・・・」

俺はその姿を見た瞬間、全身がフリーズした。そして数秒後

遙「た、楯無さん！何て格好してるんですか！？／／／」

楯無「？裸エプロンよ」

とりあえず、直ぐにドアを閉め施錠した

楯無「フッフ」驚いた？」

遙「驚くに決まってるでしょ！」

いきなり目の前に、裸エプロンの女の子何か見たらフリーズするって！

遙「とにかく、まずは服を着てください！／／／」

俺は後ろを見る

楯無「フッフ、しょうがないわね」

笑いながら、楯無さんは制服を着たようだ

楯無「もういいよ」

そう言われて、後ろを見たら制服姿の楯無さんがいた。これで安心だ

遙「えっと、楯無さんが俺と同室ですか？」

頼む。違うと言ってくれ

楯無「残念ながら、違うわよ。もう少しで、同室の子は来る筈よ」

よかった。この人と一緒だと、凄く疲れそうだからマジでよかった

楯無「ちなみに、遙一君をこの部屋にしたのは私よ」

遙一「はい？何ですか？」

楯無「それは内緒よ」

ちっ！肝心なことは教えてくれないか。喰えない人だ

遙一「じゃあ、何で楯無さんはこの部屋にいるんですか？」

楯無「遙一君を、驚かそうと思ってね」

バツと扇子を広げ、俺を見る楯無さん。扇子には笑と、達筆で書いてあった

遙一「やめてくださいよ。心臓に悪いですから」

楯無「うん。分かったわ」

扇子越しだが、顔が笑っている。常に、覚悟をする必要がありそうだな

楯無「それじゃ、私は部屋に戻るから。またね遙一君」

遙一「え!？」

頬に柔らかい感触がしたと思ったら、何と楯無さんが頬にキスをし、部屋を出て行った

遙一「本当に、油断ならない人だ」

ベットに倒れて、携帯を開くと知らない番号から、着信がきていた

遙一「まあ、用があるならまたかけてくるよな」

携帯を閉じるとドアが開いた

のほ「ああゝたっかーがいる」

何と、のほほんさんが部屋に入ってきた

遙一「のほほんさんが、ルームメイトかな？」

のほ「うんそうだよ。宜しくねたっかー」

遙「宜しくな」

やったぜ。のほほんさんが、ルームメイトなら毎日面白くなる

遙「ところで、楯無さんが俺をこの部屋にしたらしいんだけど、のほほんさん何か知らない？」

のほ「うんうん知らないよ。私もいきなり、部屋にたっかーが来るよって言われたから」

うーむ。嘘か本当か分かん。表情にまるで変化がないな

遙「まあ、いいか」

そう言っと、俺はのほほんさんの頭を撫でていた

のほ「たっかー、くすぐったいよ」

遙「悪い、つい撫でたくなつてな。えっと、シャワー先使っていないか？」

のほ「いいよ」

のほほんさんの、許可を取ったので俺はシャワーを浴びて着替え、ベットに倒れた

のほ「たっかー、もう寝るの？」

遙「ああ、眠いから寝る。おやすみ、のほほんさん」

のほ「おやすみ、たっかー」

俺は意識を失い眠りについた

次の日

遙「よく寝た」

目覚ましがなる前に、目が覚めた。と言うか、何か右腕が重いな。そう思い右を見ると

のほ「すうすう」

のほほんさんが、着ぐるみの格好で俺の右腕に抱きつきながら寝ていた

遙一「気にしたら負けだな」

こういうことは、前にも何回があったしな。余り驚くことではない

遙一「可愛い寝顔だな」

つつい頭を撫でてしまう。本当困ったもんだよ

のほ「うにゅー、たっかーおはよう」

のほほんさんが起きたようだ

遙一「おはよう」

こんな感じで、寮初めての朝は始まった

ノイズ s i d e

ノイズ「ああ、よく寝たぜ」

無事に起床出来た

最近、目覚ましが鳴っても中々起きられなかったりするから少し心配だった

ノイズ「腹も減ったし、食堂に行こう」

制服に着替えて、食堂に向かった

ノイズ s i d e o u t

明 s i d e

第「明、起きろ」

ゆさゆさ

明「あゝ、おはよう箒」

朝箒に起こされ、無事に起床。目覚まし？そんなの気付かない間に、止めちゃうからね

箒「ああ、おはよう明」

明「じゃあ、何時も通りおはようのキスを頼む」

箒「そ、そんなこと、一度もやったことないだろ！／＼／」

うゝむ、やはり無理ですか

明「まあいいや。箒、食堂一緒に行くなら着替えるから外で待って」

箒「分かった」

明「ああ、後さ僕と一夏にISのコーチしてくれない？剣道だけでも、やっておけば一応一夏の訓練になると思うからさ。お願い篤」

半分嘘で、半分本当である

篤「しょうがないな。明が其処まで言うんなら、私が手ほどきしてやろう」

よし。一応原作通りになるな

明「それじゃ、まあ着替えるから外で待っていてくれ」

篤「ああ、分かった急げよ」

篤はそう言つと、部屋から出て行った。その後せつせと着替えて、僕と篤は食堂に向かった

明 side out

宗 side

ボタンッ！

宗「何だ！？」

いきなり隣で、何かが落ちたでかい音がし俺は起き上がった

一夏「痛たた」

宗「何だ。一夏がベッドから落ちただけか」

脅かしやがって。敵襲かと思っただけで、今はそんな物騒な世界じゃないか

宗「一夏、着替えて食堂行くぞ」

一夏「痛たた。ああ分かったよ」

一夏は、腰を擦りながら着替えをしていた。俺もさっさと着替えて、一夏と一緒に食堂に向かった

宗 side out

遙「腹減った。早く食堂に行かないと死ぬ」

のほ「たっかー、お腹空いたぐらいじゃ人間は死なないよ」

俺はのほさんと一緒に、食堂に向かっている。それにしても腹減った

腹ぺこの状態で数分歩き、無事に食堂に到着した

遙「とりあえず、和食セットとキツネ蕎麦とキツネうどんでもいい」

食券を買って飯を貰う。和食セットのメニューはシンプルに鮭の塩焼き 豆腐の味噌汁 沢庵 ご飯といったメニューだ

のほ「うわぁー、たっかーは朝からたくさん食べるんだね」

遙「朝はこれぐらい食べないと、途中で腹減って気持ち悪くなるんだよ。のほさんはそれだけか？」

のほんさんのメニューは、トースト一枚にコーンスープとサラダ。
絶対俺じゃ、足りない量だな

のほ「お菓子食べるから、少なくしてるんだよ」

間食は太るぞ。だが女の子の前ではその話はタブーだ

遙「とりあえず彼処に座るか」

のほ「うん」

ノイズ達が、座ってる席の隣に座る

遙「全員おはよう」

5人「おはよう」

5人に挨拶をする。てか何で、5人共メニューが和食セット何だ？

明「僕と一夏は、放課後第と特訓するけどノイズ達はどつする？」

宗「俺はちよつと、読みたい本があるからパスかな」

ノイズ「何かだるそうだからパス」

遙「俺は別にいいけど。のほほんさんはどつする？」

のほ「私は、ちよつと用事があるから行けないよ。ごめんねたっか
ー」

遙「いや別にいいけど」

第「じゃあ、明と遙と一夏は放課後剣道場へ来い。私が手ほどき
をしてやる」

3人「分かった」

放課後に特訓か。まあ面白そうだからいいだろう。そんなことを思
いながら俺は飯を食べた

部屋決め（後書き）

次回は特訓と代表戦です。

では次回も宜しくお願いします。

特訓&クラス代表戦（前書き）

今回は特訓と代表戦です

では宜しくお願いします

特訓&クラス代表戦

遙「はあ」

朝から授業は、やはり勘弁だ。まず眠い、そして退屈な通常授業。IS学園っていうんだから、ISのことだけ勉強すればよくない？

でもちゃんと、一般的な学力もないと駄目だから、通常授業何かもやるのか

ISのことも覚えつつ、他の科目もしっかりと覚えなきゃいけないとは、何とも面倒だな

千「それでは授業を終わる。ああ織斑」

授業が終わった瞬間に、千冬さんが一夏を呼んだ

—「何ですか織斑先生？」

千「お前のISだが、用意するのに時間がかかる」

—「え？」

ほう。これは一夏君どうなるんだ？

千冬「予備の機体がない。だから、学園で専用機を用意するそうだ」

やはり主人公だな。専用機を貰えるのか。俺も専用機欲しいなあつて、もう持ってたか

女子1「いいなあ織斑君。私も専用機欲しいな」

ノ「別に、持ってもあんまり使わないからよくねえ？」

女子2「ノイズ君。使わなくても、専用機は私達にとっては憧れだから」

憧れで、兵器が欲しいって怖いな

千「まあ、届くのはいつ頃になるのか分からんがな」

そう言つと、千冬さんは教室を出た

とりあえず、俺達は一夏の席に向かった

宗「よかったじゃん一夏。専用機貰える何てよ」

一「ああ。これではアイツを倒すだけだ」

一夏、何か凄くやる気に満ちた顔してるな。だが、素人が代表候補生に勝てる確率は低いんだよな

一夏は、それが分かっているのだろうか？

セ「安心しましたわ。まさか、訓練機で対戦しようなんて思ってたでしようけど」

何か、腕を組んだドリルがやってきた。お前はお呼びじゃねえよ

遙「何の用だ、セルシア・オットット？」

またわざと、名前を間違えて呼ぶ。さてどうやって弄ってやるっ？

セ「セシリア・オルコットですわ！」

遙「ああ、悪いまた間違えた。謝る気ないけど許せ」

セ「何時まで、私を馬鹿にすれば気が済みますの！」

ノ「五月蠅いなあ。で今度は何の用？」

ノイズが、五月蠅いドリルに聞く

セ「別に用はなくてよ。ただ、一言言いに来ただけですわ」

絶対、一言で終わらない気がするがまあ言わせておこう

セ「この私、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……
つまり、現時点で専用機を持っていますの」

宗「代表候補生なら、持つてるだろうな」

と言つか、代表候補生で専用機持っていない何てあり得ないだろ？

セ「世界でISは467機。つまり、専用機を持つものは全人類六

十億超の中でも、エリート中のエリートなのですわ」

また自慢かよ。もう聞き飽きたよ

明「えー！凄いな」

セ「当然ですわ！」

おいおい明、マジでドリルが凄いと思ってるのか？

明「今60億人も、人っているんだ。イヤー知らなかったよ」

そう明が言った瞬間、ドリルがずっこけた

セ「驚くところが違いますわ！」

明を見ながら、怒鳴っていた

明「ええー！だって、其処以外で驚くところないんだけど」

セ「馬鹿にしていますの！？」

遙「まあ、そう怒鳴るなよ。エリート何だろ？ならもっと、気品よくしないと」

セ「貴方に言われなくても、分かっていますわ！」

再度怒鳴ると、ドリルは自分の席に戻って行った

全く、ただ騒いだけで戻ると暇な奴だな

キンコーンカーンコーン

とりあえず、予鈴が鳴ったので俺達も席に戻っておいた

遙「はあゝ、眠いな」

現在俺は、屋上目指してあくびしながら廊下を歩いている

何授業？そんなもん、体調不良で保健室行きますって、言っておいたからいいんだよ

遙「で？何時までついて来るんですか？」

後ろを向いて、そう言うが誰も出てこない

遙「（しょうがない。A級ジャンパーの力を使うか）」

恐らく、廊下の右側の死角にいる。其所をイメージし

遙「ジャンプ」

俺は其所に、短距離ボソングジャンプをし後ろを見ると

遙「何か用ですか。楯無さん？」

後ろにいた楯無さんに、話しかけた

楯無「いつの間に、後ろに移動したのかしら？」

遙「見てたでしょう？なら分かる筈ですよ」

今、ボソングジャンプして移動しました。何て言っても、絶対分からないから言わない

遙「で？自分に何か用ですか。楯無さん？」

楯「遙一君が、授業をサボって何をするのかなって思ってた」

だからって、後について来るなよ

遙「はあ、サボってませんよ。体調不良で、保健室に行こうと思ってたんですよ」

楯「保健室は、逆の方向よ」

しくった。保健室は、別方向にあるのすっかり忘れてた

遙「まあ、話なら別の場所でもませんか？」

廊下で話していて、教師に見つかったら面倒だ

楯「なら、私について来て」

楯無さんが、そう言うので俺は楯無さんの後に続いた

暫くして、一つの部屋に到着した

楯「此所で、話しましょう」

そう言うと、楯無さんはドアを開け中に入った

遙「生徒会室。まあいいか」

特に気にもせず、俺も中に入り客席に座った

遙「はあゝ、眠い。寝ていいですか？」

楯「まだ、来たばかりよ」

何か楯無さんは、呆れているようだ。しょうがないだろ、眠いんだから

遙「はあゝ、さて話をする前に敬語やめていいか？」

楯「最後、敬語じゃなくなってるわよ。別に構わないわよ」

やっと、面倒くさい口調から解放される

遙「じゃあ、とりあえず俺に話があるんだろ？」

楯「ええ。遙一君、貴方を生徒会副会長に任命します」

何だと？生徒会副会長？

遙「俺に拒否権は？」

楯「生徒会長権限だから、ないわよ」

回避は不可能のようだな。まあいいか、面白くなりそうだから

遙「分かったよ。謹んでお受け致します会長」

一礼しておく。何でかって？何となく

楯「改めて、宜しくね遙一君」

遙「宜しく。ついでだ楯無膝貸してくれ」

楯「何で、膝何か借りるの？」

遙「寝るから」

とはつきり答えると、楯無は笑いながら足を胡座をかくように崩した

楯「どうぞ」

遙「失礼する」

楯無の膝に頭を乗せる。柔らかい膝だな

遙「お休み楯無。予鈴が、鳴ったら起こしてくれ」

楯「分かったわ。お休み遙」

最後呼び捨てだったな。とりあえず、俺は目を閉じ寝た

そして暫く経った後

遙（何か、悪意を感じるな）

そう思い目を開けると

楯「残念。起きちゃったか」

楯無が、ペン片手に何かしようとしていた

遙「何してるんだ楯無？」

楯「ちょっと、出来心だから気にしないで」

ウィンクしながら、ペロツと舌を出し俺に言う。まあ、今の仕草可愛かったから許そう

遙「はあ、で授業は？」
キーンコーンカーンコーン

うむ、丁度終わったようだな

楯「終わったわよ。午前中の授業」

何？午前中の授業だと

遙「まあ、いいや。眠気は覚めたし」

そつ言い、あくびをしながら俺は起き上がった

楯「食堂に行くの？なら私も行くわ」

楯無も立ち上がった

遙「なら参りましょう。プリンセス」

右手を差し出す。エスコートは、ギアスの世界で会長とユフィー相手に散々やらされたからな

楯「え、ええ／＼」

とりあえず、楯無と一緒に食堂に向かった

食堂で楯無と別れた後、のほほんさんが俺の所へ来た

の「たっかー、戻って来なくて心配してたんだよ」

遙「悪い。ちょっと寝てたら授業が終わってたな」

頭をかきながら、のほほんさんに説明してその後一緒に飯を食べた

そして放課後

篤「どういうことだ？」

今剣道場で、篠ノ之が倒れている一夏を睨んでいる

理由は、剣道場で剣道をやったら一夏がほんの数分で、篠ノ之に敗けたからだと思われる

篤「どうして、こんなに弱くなっている！」

明「確かに、ちょっと弱すぎたと思うよ一夏」

明が、若干笑いながら一夏にそう言う。だが聞いた話によると、篠ノ之は剣道の全国大会を優勝したことがあるらしい。なら、ほんの数分で敗けたのも当たり前だと思うんだがな

第「中学では、何部に所属していたんだ？」

一「帰宅部。三年連続皆勤賞だ！」

自身満々に言っているが、一夏それは自身満々に言っていることじゃない

まあ本人は、千冬さん助ける為にバイトする為だからと言っていたが

第「直す。鍛え直す！IS以前の問題だ！これから放課後は、明と一緒にみっちり鍛え直してやる！」

篠ノ之は、一夏の発言で怒りそう怒鳴っている。全く五月蠅いな。というか、俺の名前が入ってないがまあいいか

「待つてくれ！俺はISのことについて・・・」

明「諦めろ一夏。一応、剣道の動きも対戦では役に立つさ」

明は、笑顔で一夏に告げる。一夏も、諦めたのか何も言わなくなった

箒「次は遙一、お前だ」

篠ノ之からご指名。まあ、ぼちぼちやりますか

遙「了解。その前に名前で呼んでいいか？」

面を被り、竹刀を持って篠ノ之に聞く

箒「別に構わない。では始めるぞ！」

箒の一声で、始まった。まずは距離を取ったが

箒「はあー！」

箒が一気に距離を詰め、俺に竹刀を振り見事に面に直撃した

遙「俺の敗けだ」

面を外して、箒を見るがかなり睨んでいた

遙「何だ？」

箒「真面目に、やる気はあるのか？」

遙「何か、面倒くさくなつたから部屋に戻るわ」

手を振りながら、俺は剣道場を後にした。無論その後の数日も、ろくに特訓などせず普通に過ごした

それから、早くも一週間たち、現在俺とのほほんさんと、一夏と箒と明は第三アリーナのピットにいた

ついでに、山田先生からドリルのISについて教えてもらった

IS名ブルー・ティアーズ

中距離射撃型の、第三世代ISらしい。まあどうでもいいが

遙「はあ、眠い。のほほんさん、寝るから膝貸して」

の「うん。どうぞたつかー」

椅子に寝転び、のほほんさんの膝に頭を置き寝る体制に入る

明「いいのか遙ー？試合と一夏のIS見ないでよ」

遙「別にいい。試合は、相手の手の内を知らない状態で、戦わないとフェアじゃねえだろ？だから見ない。一夏のISは、その内見れるから今見る必要はない。じゃあのほほんさん、試合終わったら起こしてくれ」

の「分かったよ」

試合が終わるまで、俺は目を閉じ眠りについた

遙一が、眠って暫く経った後

の「たっかー、試合終わったよ。起きて」

遙「はぁーもう終わったのか？」

何分経ったか知らんが、あくびをしながら起き上がる

遙「結果はどうなった？」

の「おりむーの負けだよ。後ちょっとだったんだけどね」

何だ、一夏敗けたのか。なら尚更敗けられないな

千「高遠、次はお前の番だ。油断はするな」

遙「分かってますよ。よし、行くか」

機体は、何にしよう？うーむよし！

遙「行くぞ、タウンバーン。アプリボワゼ！」

そう叫ぶと、俺の格好はまずISスーツが銀河美少年の服になり、全身にSTAR DRIVER 輝きのタクトのサイバディ、タウバーンの装甲が装着された

の「わゝ、たつかーのIS貴公子みたい」

遙「そうか？じゃあ、ちよつと行ってくる」

の「うゝん。頑張つてねたつかー」

のほほんさんに応援され、俺はピットから出撃した

ピットから出ると、少し上空にドリルがいた

遙「颯爽登場！銀河美少年 タウバーン！」

上空のドリルに、向かってツナシタクトの決め台詞と決めポーズを
かます

一度、やってみたかったんだよなこれ

ドリルは、啞然としながら俺を見て

セ「な、何ですのそのISは！それにそのポーズと台詞は！」

と言っている。まあ普通ならそう言つよな

遙「えつとISは、こんなISとしか言えない。このポーズと台詞は、言ってみたかったから言つたんだ。てか眠いから、とつと始めようぜ」

そつ言つと、両腕を前に出し構える

ドリルも、自身の銃スターライトmk?を俺に向ける

セ「いいですね。全力で貴方を倒します！」

千「では第二試合、高遠VSオルコット始め！」

セ「行きますわよ！」

ドリルのスターライトmk?から、ビームが発射されたが

遙「スターソード エムロード」

胸に手をやり、其処から緑色のレーザー刀？エムロードを出し弾いた

セ「一夏さんと同じ、近距離タイプのものですわね。なら接近させなければ、此方のものですわ！」

ドリルがブースターを使い、距離を取りながら俺にビームを連射するが

遙「当たらねえよ」

俺はドリルに向かいつつ、スターソードでビームを弾きながら進む

セ「やりますわね。ですが！」

そう言った瞬間、ドリルのISのフィン状のパーツが、ドリルから離れ俺に向かって来た

セ「踊りなさい！私とブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

俺の周りに来た、フィン状のパーツがビームを発射してきた

遙「ファンネル？ビット？ガンバレル？ドラグーン？ファング？あ
あもう、ビットでいいか」

発射された、ビームを避けつつ誘導兵器の名前を全部言ってしまった

遙「まあいい。俺は踊るのが嫌い何だよ」

ビットから発射される、左右から来るビームを上手く掻い潜り一つ
を斬り裂き破壊し、ビットに注意しながらドリルを見ると

遙（？何でアイツ動かない？攻撃もしない？いや出来ないのか。ビ
ットの操作は、アイツが常に命令しないと出来ないのか）

二つ目を斬り裂き、そう思い

遙「欠陥機だな。ビットを、動かしてる最中は何も出来ないわ！」

スターソードを、片方のビットに投げ破壊し、もう片方はビームを
反転して避け手刀で破壊し、投げたスターソードを掴みドリルに言う

セ「まさか！短時間で全て破壊される何て！」

遙「面倒だ。ダメージ喰らう覚悟で突撃だ！」

セ「そうはさせませんわ！」

スターライトmk?を連射しながら、ドリルは距離を取ろうとするが、先読みで弾道を読み全てスターソードで弾き、接近するとドリルは笑い

セ「おあいにくさま、ブルー・ティアーズは六機ありましてよ！」

腰部のスカート状のアーマーから、ミサイルが発射された

遙「そうか。だが生憎スターソードも二本あってな。スターソード
サフィール！」

もう右腕を胸にやり、青色のスターソード サフィールを取り出す

セ「今更、そんな物を出しても直撃ですわ！」

遙「どうかな！」

二機の、ミサイルの弾道を読みそのまま接近し、俺は交互のミサイルの間に入り二本のスターソードで一刀両断し破壊した

遙「終わりだ！」

セ「くっ！インターセプター！」

斬撃を放ったが、ドリルは一本の近接ナイフで防ごうとしたが

遙「甘い！」

しかし斬撃を途中で止め、右足でドリルを蹴り飛ばし

遙「豪快・銀河十文字斬り！」

セ「きゃあああ！」

体制が乱れているドリルに、二本のスターソードで×字に斬り裂き、ドリルを地面に叩き落とし

千「勝者 高遠遙一」

俺の名前が、呼ばれて俺が勝った

遙「ふう。立てるか？」

地面に降りて、手を差し出しドリルに聞くと

セ「一人で、立てますわ」

ドリルは、一人で立ち上がった

セ「お強いんですね。想像以上でしたわ」

遙「ふ、一夏以外の俺の達も同じくらいだぜ」

セ「そうなのですか！？」

かなり、驚いているようだな

遙「まあ、それは置いといて楽しかったよ」

俺はそう言い、左手を出す

セ「次こそは、絶対に私が勝ちますわ！」

ドリルいや、セシリアも右手を出し握手した

遙「なら、もっと強くなれよセシリア」

セ「はい遙一さん。後貴方達に対する、今までの態度を謝罪します」

手を離し、セシリアは俺に頭を下げた

遙「いいよ謝罪何てよ。戻るぞセシリア」

セ「はい」

その後、俺とセシリアはピットに戻り解散して代表戦は終わった

帰り道

遙「ああ、眠い。眠すぎる」

の「まだ眠いの？」

あくびしながら、俺はのほほんさんと帰っていた

遙「ああ、戦った後は疲れるからな」

の「戦ってるたっかー、格好良かったよ」

何か、のほほんさんにそう言われると嬉しいな

遙「なあ、のほほんさん」

の「なあに？ たっかー？」

遙「二人っきりの時は、名前で呼んでいいか？」

何で、こんなこと言ってんのか自分でも分からなかった

の「いいよ、たっかー。でも何で？」

本音は、笑顔で了承してくれた。何でと言われても

遙「何となくだ。じゃあ、さっさと部屋に戻ろう本音」

本音の袖に手を入れて手を掴み、早足で歩き出す

本「速いよーたっかー」

そのまま、手を繋いだまま部屋に帰り今日一日は終わった

特訓&クラス代表戦（後書き）

次回は授業と祝勝会の予定です

ではまた次回

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1287w/>

ISの世界で彼女を作るぜ

2011年11月13日19時23分発行